



伽羅先代萩

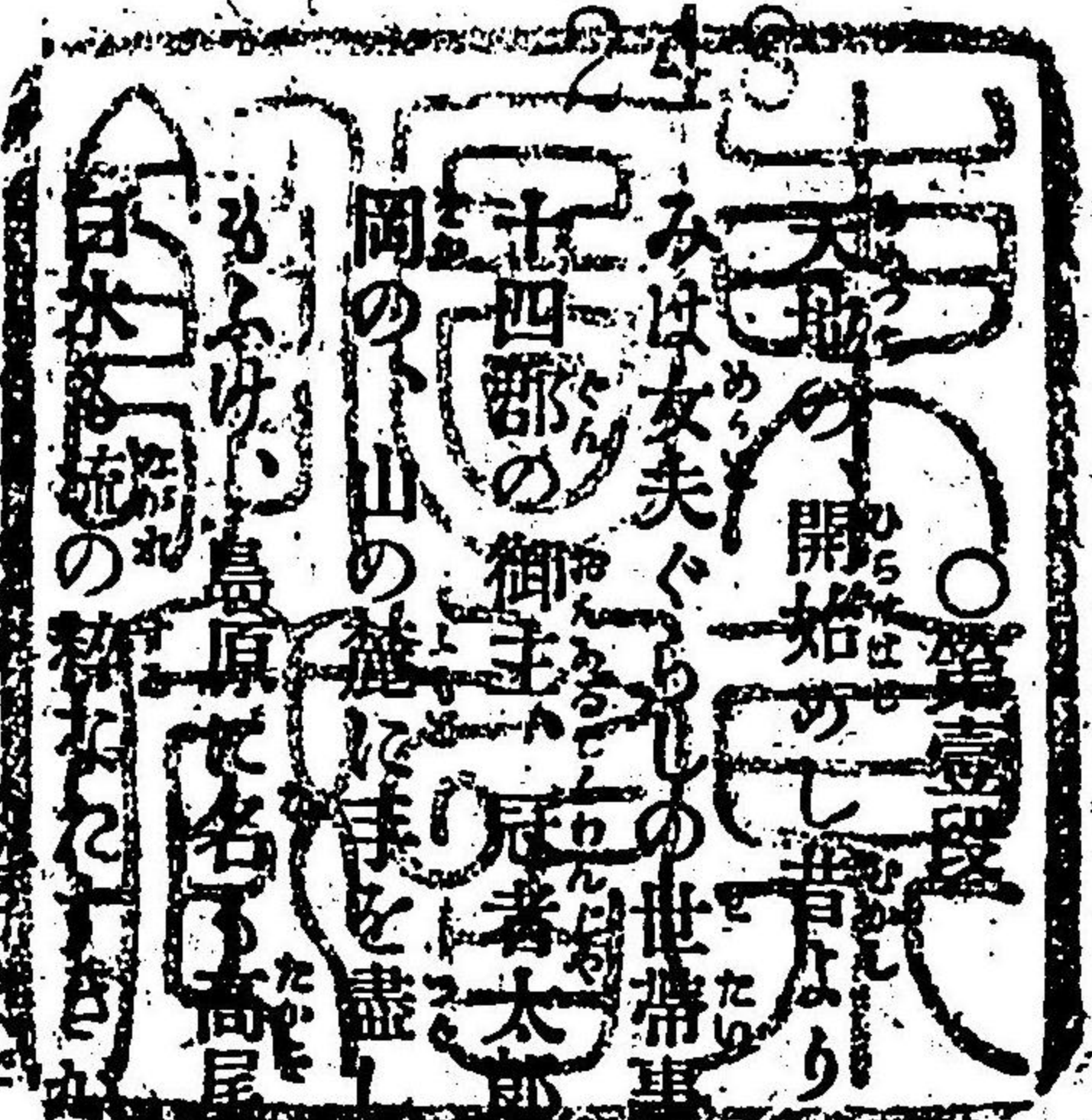
150
714

伽羅先代萩

作者 松高 貫武 兵
吉田 角



特65



大地の開始のし音より
みは女夫ぐらしの世帯事、手鍋提るが眞實の、誠の戀の睦言や、詞「五
十四郡の御主人、居者太郎、義綱公、今日吉辰の宿這入、「都はなれし舟
岡の、山の麓に手を盡、さらそ、みがさしくすやぶさ勝手、賑ふ客
もよけ、島原を名下高屋とて、盛あらうふ太夫職、手づからかしく、
白水を流の精なたきかけ、御大將はまな板に、さざむ鱈も五分切
の、國分煙草を禿の楓、お氣がつけふと長烟管、詞「ホ、コリヤよふ氣が付
た、コレ太夫、イヤこちらの女房ども、そなたもさつさにから米洗ふて、定

伽羅先代萩

めて肩がつかよふ、ア、一休したがよい、ア、私より殿様の仕付もなされぬ切ささみ、嗚、お肩が痛ませう、阿、よつ程久しう洗ふたりや是で大かたよいで有、是からお粥をしかけふと、云に楓が小利口に、二人してかく米かし桶、二つべつゝに金の釜、玉を、のべたる玉だすき、伽羅割よりも持ぬ手に割木のそげもいたくし、奥より太鼓、やり手の夏、お二人様ながら、嗚、嬉しうございませうな、此様にれ目出たう、宿這入の御祝儀によばれるといふ事は、ほんに、此頓吉太鼓冥加に叶ふたといふ物のふお夏、ア、私も大勢の太夫様方をまはしたれど、此様に内かたへくるといふは是が始、だん、とお居くろめなされて、ね二人の中に和子様も出来る様、ア、申太夫様、釜の下がきつふくすばるぞへ、そして何じややらむしやうによいにはいが、ど、ど、ど、よふ炊はさんすまい、其火吹竹といふ物

を、堅い木じや、頼吉様見やしやんせ、ア、こりや堅い筈じや伽羅のふし木じや、ど、ど、ど、大名の宿這入は違ふた物じや、極樂世界と喜見城、彼唐土の阿房宮、三千世界に有とあらゆる結構づくしをわつめても、又と有まい指向ひ、大方かゆは金色の、ぼ、つ、の世話事床がため、御新宅の地形がため、目出た、若松様よ、枝も榮る葉もしげなれ目出たい、よのお目出たい、千秋萬歳、万々歳、阿、頼吉目出たい、皆知てる通、此高尾が突出から逢か、つて、毎晩、通ひ詰る此義綱、せまい廊の居續に、とんと気がつまり切、ど、ど、ど、氣の替つた事がしたいと思ふ内、ア、錦戸刑部といふは誠はおれが伯父なれど、今では家老同然、流石血筋程有て顔に似合ぬ粹親仁、此様に家を立て太夫とれれとたつた二人、百姓と云者の真似をして、大名事は忘れて仕まへと、あれがすしめに爰へ引越、わいらをお客に

おれが料理、太夫も今朝からせい出して、米洗ふたりかゆ焼たり、
 大体面白い事じやない、こんち事ならとふから百姓に成物を、何
 の因果で大名に生れた事じや、第一何を云付ても、ハハといふて
 何一ツないといふ事のない其不自由さ、女子供は女子供で曲輪のは
 りとは違ふて、爰へこい、ハハ帯どけ、ハハ足上いハハと此様に思ふ様に
 物事がいては、世に生てゐる甲斐はあ、ハハんに若人達も嘸退
 屈、ソレ太夫、家渡がゆが出来たらお客がたを奥の間へおりや膳立と
 何事も、珍らし盛りたわいさく、そんなら奥でお祝ひ申そふ、サハハ
 こちへと打連て、奥の座敷へ入にける、折から表賑ひて、彼船岡の
 く、ハハ宿這入の門にて、ハハお目出たいやんらお目出たい、ハハ
 イヨチイコエ、コレハサンエ、ヨチイコエ、アレハサンエ、エもしも山の手のてんから大事の小娘
 が落たら喧嘩に成まいか、ヨチイコエ、ヨチイコエ、よい、よい、やな、聲も崩への染

頭巾、坂道を押大八車、門口に引付いて、御新宅の御祝儀に一つし
 めましよ、よい、よい、一つせよ、祝ふて三度、めつたひせう
 に目出たがる顔は錦戸、刑部か、真珍らしい洒落姿跡なは荒灘風之
 助、車に乗せられたは、何じや、今日殿様高尾様御宿這入の御壽さ、刑部
 様より御家見、車につみしは金子の箱、御心付たる御音物、ソレ内へ
 かき入よ、はつと皆く立寄て數限らぬ千両箱、つみ上く上板も
 じはる計に並べおく、義綱公は打詠詞、粹を刑部が進物なら、何ぞ面
 白い器物で有と、楽しんでいたに金子の箱とは、ハハ見た所が面白ふも
 あい物、ハハ何の役に立物じやと、不興に刑部両手を突、御誕生有
 てより外を御存なき御身、御不審は御尤、某がお進め申、今日只今
 百姓とお成さるれば、只今迄とは違ひ殿と高尾殿とお二人にて、
 世帯方をなされねばならぬ、其世帯と申には、いらで叶はぬ物は金、

掛屋方へ申付、箱の中に千兩づゝ、金高は三万兩、其様に云ても、其金とやらいふ物を、とふするのじや合點が行ぬ、其義は荒灘めが申上奉らん、何事も御存なき御殿様、今迄は御家老方、御小性近習用人なんど、あまた役人承り、何から何迄致せ共、是からは御自身に世帯方をなされにやならぬ、先第一の立物は米、是も今日より米屋と申者の方へ、太夫様でも、お出なされ、彼米屋より五升でも一斗でも、かますといふ物に入れて持て參夫を飯に拵るには、薪と申物を遣にやならぬ、其まきやにて、和らか炭一俵、是は早く火がおこり、女中方には調法な物、夫より味噌塩醬油、現金では扱せはしぬ物、そこで是を置替と申物に吞込せ、先千兩箱一つ二つ、先へ預て置、夫からお二人差向ひで遊んでは喰、喰ては遊び、うかくとする内に三十日といふ恐しの物が來ると、書出しと云物を持て、

常は笑顔のよい親仁が、其日は急にこはい類、其時にアル、金箱、其儘ではつかはれぬ、四文錢と云物に取かへて、さらりくと拂ふて仕まふ、又金がない時には質といふ物を置ねばならぬ、是が又重寶な物、代物を持って行と錢でも金でも二朱銀でも、望次第にかへておこす、ア、まて〜荒灘大概は承知したが、今の質の所が大分面白い、金を早ふ皆にして其質が早ふして見たい、又何にもあふ成たりや、其時は此刑部が掛屋方へ申付何万兩でも差上る、ハ、金といふ物は澤山に有物じやな、ア、つかいやらは覺た〜、今云た米やまき、ろして味噌鹽とやらいふ物、荒灘ちよつと買て見せい、ハ、畏り奉る、ハ、白米壹斗まき四五把和か炭一俵、此直段がかふと千兩ぐらゐで有で有、家來中手譯して、追付買て參らんと金箱かたけ立出る、家來がしめる草鞋のはるかの里へと出て行、すれ違ふたるま

かい道、夫者と見へる本田わけ、一つに合す裏も黒い顔付三浦屋才助、うろく見廻す門の口、調ちと物がお尋申たい、若爰らに冠者太郎義綱様といふ、お大名の店越はござりませぬか、太夫か、才助様よふお出、義様も夫にござるか、高尾が親方、何と思ふて、何と思ふてとは、お前はくくめつそうな方じや、此親方にも得心させず、禿やり手迄引連て大門へも断ちし、行方が知ぬ故、こちらの内は上を下へとませかへす中に、去方から高尾を身請、言て来ても肝心の、玉が知れぬで方々へ、尋歩此才助、高尾早ふこい、但しは高尾が身請金、今請取れば云分なし、あちらへ遣ふか金渡すか、とふじやと高聲はお定め成せりふ也、調ち才助、わが云事はとんとわからぬ、高尾はおれと宿這入したれば、とつこいもやる事ならぬ、うんなら身請なざるか、其身請とは何の事じ

や、身請と云は太夫が身の代、其身の代とは、合點の悪し、コレ太夫を爰に置度は、金を此才助にお渡しとされと申事、金か、初からそふいへば濟事を、其つんで有金を、望次第に持ていぬと、仰に見付る千両箱、世は末世に及んでも有所には有物じやあ、したがあんまり金過て直の云出し様がない、エ、かうつ、三百兩では、あんまり安い、六百兩かい六百兩ではもうけがすくあら、うつ飛で千兩か、夫でもとふやら安うふな、エ、と云ふと目もうるく、金にむせるぞ道理なり、刑部聲かけ、才助とやら、何をうるく、誰有ふ冠者太郎義綱公の御臺所に定る高尾殿の身請、いか程と極めては世間の聞へ、夫に積んだる千両箱、其方が力次第、持れるだけ持て歸れと、云に才助猶胸り、夢ではないか夢にでも、こんな嬉しめ有難い甘い事が有物か、たとへかいなは折る共、調存分

取らいでおくべきかと薪の、繩切是幸、金箱手早に七つ入つしつか
 どく、り肩腰入、上てもく、いつかなく、爰らが男のしんぼう
 と、惣身の力を肩に入、心はやたげとはやれ共次第に精根つさ
 息切、目廻あせたらしく、詞、扱もく、此様を因果な事が有物か寶の
 山へ入ながら持事ならぬは金持に、あられぬといふ印かと涙乍らに
 こつてく、取へく箱のうらめしく、残多げに漸と一つかたげる一
 人言ひよろくくしてぞ立歸る、詞、ても扱もよはいやつ、
 是では又へらし様を工夫せずば成まい、刑部も奥へ、太夫もおじ
 やど、うつかりおんくはの御大將、金花咲陸奥を、心がけたる錦戸
 が、いざ御入と打連て奥の二間に入にけり、山道も都なればや和
 らかに、育がらある風俗は十七八の角びたい、貝田勘解由直勝が一
 子源之助、立派作の大小も、角菱立ぬのつとり顔、跡に付添ぼつと

りは、伊達明衡が娘松島、夫婦といふは名計のまた盛り見ぬ躑躅山、
 婢家來はかたへに残し、打連來る庵の戸口、詞申と源之助様、道々
 も申通り、殿様の情弱の御身持、國にござる噂様から、御意見申上
 よと窃の多舅御様へ申上ても聞入なく、御諫言もなされぬは、どう
 思召御心やらわんまり心ならぬ故、及ばずながら殿様へ御意見を申
 上ふと思ふても女の身、お前を楯に云ふ爲、最前から申た事、よふ
 覺へなされましたかへ、ヤハ先にから云やつた事餘り長ふて一つも
 覺へぬや、大概な事から覺させずとよしにしやいのふ、エ、つん
 と、譯もあい事計、最前から申た通り、ア、まらや、むづかしむ
 事じや故ちうでは覺ぬ、またしなみ持てぬと、鼻紙袋の石筆に、
 今一遍云て聞しや、殿様のお身持御放埒、ア、コレ、其様に長ふ
 いふ事は、筋計で跡はかれが胸に有、ア、一つ殿様の事をふして

から、館へもお歸りなく晝夜をわかれたぬ御放埒、よよし御放埒の事、もふ是でよい、大概心算は書て置た、早ふ内へいのお、又何をおつしやるぞいのふ、殿の御目にもかしらぬ先、内へ歸てよい物かいお、はんにとふじやのふ、申必し行儀やう何にもお忘あされおと伴ひ這入門の口、誰ぞお取次頼ましよと、音なふ聲に奥よりも立出る錦戸刑部、貝田の子息源之助、松島どの夫婦、扱は段の御機嫌窺、お出の様子某が後程宜敷披露せんといへど答へもうてかりひよん、松島は氣の毒さ源之助様、刑部様へ御挨拶、夫早ふおつしやりませ申くと氣をもめば、御挨拶とは何の事じや、エ、はんにしん氣を事では有ぞ、下へおすわりあされませ、夫な行儀に両手を疊へついで、香込だくと、かしこまつて手をつかへ、何とやら、夫、思ひ出したと懐より、以前の

書付取出し打詠、一殿様の事、殿様が何と致した、エ、うらしてから、御放埒の事、何御放埒とは、其跡は、何やら有たが、夫、覺れ、わらく斯の如く也、松嶋と譯もあき傍にはひどり氣をもむ松島、綿戸刑部にが笑ひ、親に似ぬ發明人、何の事やら分らぬと御放埒といふからは殿へ御諫言との事ならん、こりや松嶋の付智恵で有ふ、其方の實父伊達明衡、國家老を鼻にかけ申越たに違ひはない、此刑部は別腹故家臣の列に加はれ共、まよしく義綱公の爲には現在の伯父異貝してよければ某が諫言する、いらざる女の忠義立、早歸りやれと傍若無人、横紙破りに松島も何と詞もあき折から、荒くれ男の天窓付のけぞりびんもまさかりにくり付たる夏紅葉、遠慮會釋も門の口、すつと這入て上り口、今日には爰に大金持の宿這入が有て、榮耀榮花のはたへ次第奢次第と聞た

故、とて薪でもついでした物では賣まいと、思ひ付た此紅葉賣に來た此男、サア買て貰ひましよ買て下んせと、云も一曲有頼付、錦戸さつと見、詞、ヤア、己は先年義綱公に諫言して、用ひあきをいささほり白晝に國を立退し熊川源五兵衛、よ、聞へた浪人のかてにつき家々をゆすり、商賣、古への主共知らず、百姓町人と心得慮外千万、錦戸刑部が前共云ず狂氣同然のびらう者と、きめ付れどびく共せず、くつくと吹出し、ヤアぬかしたり腹の皮、三千世界に主君があければこはい、物のない此熊川、慮外と云る、事はないぞ、三度諫めて身まりぞくと古語に引かへ、百度千度の諫言も、傍に付添ふ倭人原めが、さ、ひこささい云廻し剩へ御前を遠りよ、やら腹立に妻子を連、四年以來浪人住居、聞くまいと思ふ程彌々聞へる殿の放擲其元は傾城め故、コレ紅葉は高尾の名物、是真此様に打切て仕舞が、主君の自覺

しお家の爲、寵愛の女を手にかけてし殿が腹を立られふがとんぼらがへりしられやうが、うところはかまはぬ源五兵衛、國に残て明衡定倉兩人が、知らせ顔は知行が惜しさ、ヤアさつとこいつも祿盗人めかつしても盗泉の水儕等と一ツに呑ぬ某、傾城めを爰へ出せ留たてすると相伴に此まさかりでから竹割、病の根を切一療治と不忠の良薬熊川がにかいき、めぞ手ひどけれ、詞、ヤア云して置は様々のたは言、早立歸れと引立る、手先を掴んで引かつき、真逆様にづでんどう、もう赦されぬと刀の鯉口、ヤレ暫く待れよ刑部殿、熊川氏も早まられあと、疾より戸口に貝田勘解由、二人が中に分入て委細一々承はる、熊川殿の忠節、適々其方國元を出られてより某竊に御諫言申せ共、情なや御聞入なき其元は、國に残る明衡定倉此貝田を忌きらわ、御前を遠のけん爲、奢を進め込、用金と主君にあてがひ稻妻郷助とい

ふ筋無者を御傍に付置、御情弱を進るは兩人が心に一物有ん、某御傍を放なばいか成珍事も出来らん兎角時節を見合さんと、御心に入事のみ御諫言も申さぬは、御傍を放れまい爲心を盡せ共、誰有て片腕とする忠臣なく、様々心をいためる此時節、思はせも熊川殿此所へ來られしは、某が身の大慶此上やあるべき、是より兩人心を合せ佞人逆臣の奴原一と追しり予けんは我方寸の内にも有り、忝や嬉しやと誠をあらはす忠義の詞、源五兵衛も納得し、詞、忠義の爲どおいやれば何國迄も立ぬく熊川、定倉にもせよ明衡にもせよ逆意と有ば國へ立越擲殺すに何の手間隙、此儘に國元へとつと立上るせいさう者、詞、いやくせいては返つてお爲あらず、一ト先我家へ御越有、諸事の密談、フシ、勘解由、そりや何事向ふ見すの、熊川、こなたの屋敷へ連歸り密談とは此刑部は吞込ぬ、何事も此貝田が、

お家の爲に心を碎く仕上は跡にて、ヤア倅松島も諸共に熊川殿を御供申せ早く〜と諫めの詞心ならぬと松島が、詞、御案内、源之助様、もふいぬのかヤレくはつと退屈した、シタガわの強い人が出たのでどふやらちつと気が晴れた、ヤア〜いあふと先に立、詞、然らば貴殿のお屋敷へ委細はあれでと勘解由が式禮熊川は皆打連て出て行、跡に錦戸不思議の顔色、詞、勘解由兼、某と心を合せ、義綱を嘘氣に仕込忠臣の奴原にわいそつかさせ取て押込、鶴喜代に跡目を願ひ後見と成て一家中を味方に付、其上で鶴喜代をなき物にせんと日比の計略大概に出来か、つた所、忠義立するア熊川、取込だ我心は、殿の爲とたらし込、國に有伊達泉兩人を片付させば、跡に氣ぶさいな者もない五十四郡は心の儘、只何事も我胸にちつ共氣遣ひあられまど、悪事にかたまる詞の下、宙を飛で稻妻郷助息を計りに駈來り

斯と見るより両手を突、詞「ヤア御兩人共是に御入、殿様の御用有てお館へ参し所何かは知らず國元より早馬、早駕籠上を下、何分殿様が御座なくてはと存じ息を切て立歸ると云もひい〜〜すた〜息、詞「ホチ出かした〜、我々が御供は人の自立は御爲めあらせ、汝は館へ裏口より片時も早く御供申せ、早く〜に稻妻が、はつと計に奥の方、折柄歸る風之助錦戸見るよりコリヤ荒灘、詞「日比言付置しは爰、外に供なき冠者太郎、跡より追付道中にて人知ず討放せ、コリヤ必ぬかるか、合點と風之助道を早めて追て行、かゝる所へ貝田が若黨有村金助、色真青に駈來り、詞「若旦那を御供し歸る麓の組傳ひ羽色餘鳥に異なる山鳥、人も恐れず岩の上、元よりあどあど若旦那、手取にせんとなされしに、はつと立たる跡を追、山路へ追駈御入有とどかいくれに行方知ず松島様の御歎さあやまら有てはいか〜とど、

熊川殿にお頼申と、數多の下部は手分して、尋る隙に右の様子御知せ申さん爲暮に及ば、氣づかはしお旦那にも御出有と云捨て駈り行、刑部も悔り貝田勘解由、心おろかあ我倅古狼野干の所爲成か、何にもせよ捨置れず、刑部殿には義綱の有無の音連相待れよと駈出心も夕陽の日影を追ふてぞ走行、岩間谷陰咲揃ふ花踏ちらすいでん走、我子を尋る氣はそゝる駈行坂中、物ころ見ゆれと立寄見れば若黨金助のたれ伏たる骸は血まぶれ、見るよりくわつと怒りの眼、詞「ヤア主に忠なきひさやう者と、死骸を谷へはつたと蹴込、詞「必定猪狼の仕業あらん、たとへ天狗の所爲成共、大丈夫の一心に、何を求め得ざるべき峰をくすし谷をうがつても我子の敵、みぢんにあさで置べきかと眼血走氣は半亂駈行こあたの洞穴より、詞「ヤア暫く貝田勘解由、汝を待事や、久し、對面せんと聲をかけ、立出る其形相む

ぐらの髪を振亂し、身は白狼の革衣まゆげもれ来る眼の光り、鬨の
 扱は家來を害し、倅源之助を奪しは汝が仕業よ、倅が生死白狀
 せよと、はつたと白眼ばにのここと笑ひ、鶴、竹の林に住虎は勢ひ猛さ
 物なれど、我子の別を悲しみては、千里に功有足瘞て、歩をなす
 事わたはずとや、さしもに勇成員田あれ共、恩愛の道捨がたさ、心
 を計つて一子を取、此山中へつり寄しは、大望の片腕共頼ん爲の我
 がはからひ、元某は常陸の大椽國香が末子、常陸之助國雄と云者、汝
 が主人義綱は陸奥守秀衡が嫡孫我父國香は隣國にて互に武威を争て
 數度の合戦軍慮をみがさ、軍に勝利の時も有、又は敵の方便に乗、
 飼味方追る、折も有、蝸牛の角の争ひも、天のさせる運命は、いか
 成猛將勇者成共、叶はぬ時節かやみくと、秀衡が謀事に思はぬ深
 入伏兵共、一度に起つて亂戦に、飼父を始兄國光、宗徒の郎等一騎

も残らず討死と聞たる時の我無念、はせ付て父の仇吊軍せん物と、
 心のはやれど幼稚の某、頼がたさき人心恩護の家來も、皆ちりりく
 時節謀て秀衡を、一太刀恨ん其爲に、飼跡をくらまし國を立退、六
 十餘州を遍歴し、深山幽谷に身をこらし、習ひ覺し妖術幻術、魏
 の孟徳をさやませし、左慈が傳るきたるの妙術、隠る、時は芥子に
 も入また顯はせば天地にまたがり、心の儘に身を變じ、飼神變きた
 い心の儘、錦戸刑部と心を合せ、國を奪ん汝が胸中、計知たる我術
 にておびさ寄しも心を合せ、秀衡が末孫を討て亡父へ手向ん爲、勇
 猛智謀は汝に有、我妙術を添るならば龍につばさを生ずることし、
 大望成就疑ひあしと、胸中見抜ききたいの曲者、飼、適成汝が
 飼、我大望を見すかす上は何をか包ん、錦戸が工みに組するは彼が
 權威をからん爲、事成就せば打殺し、五十四郡を手に握らば一天四

海も一擲、詞冠者太郎が家に傳る亂髪といふ一陽、疾より奪ひ身を放さず、刀紛失の次第情弱の身持、かへつて國へ通達すれば館の騷の虚に乗て、事を謀る方便は様と、面白やと猛悪に、悦ぶ國雄も勇立、心地よし強勇強傑、詞返しおたふる源之助子孫の榮請取れよと、引立出る源之助、親の工みも夢現、別ちつたる家來共追々尋見付る人影、詞「ア、お旦那是に若旦那と立寄下部を振打に右と左へ踏飛し、詞あやしめられては事の破れ只狼の難に合しと云ふらすも、密事の血判やがて再會くと、立別たる深山路や、おたはぬ望は童に、花咲まじる躑躅山我家へこそは立歸る

伽羅千代萩

○第二段

夜目にきらめく門構みがさ立たる金物の、紋も羽をのす竹の丸冠者太郎義綱の上屋敷、用心嚴敷拍子木の音さへすみてしんくたり、色と酒とにうつゝなき、身は空蟬のもぬけがら、高尾が肩に義綱公もつれもつる、千鳥足、跡に付添稻妻荒灘門外近く立留り、詞申殿様、爰がもふお屋敷現ないお姿ではお家來中に見る目も氣の毒、心を付遊ばせど、いへとたわいもふらくねむり、詞「ア、申し高尾様其様に氣の毒がる事はない、縦どふなされうが、皆殿のお家來計りこはい者は一人もあいら、御門を開かせんと、荒灘は門の戸びら割る計に打たさ、詞殿様只今御歸館成ぞ、御門を早く開かれいと、

いへどひつそとしづまつて答る人もなかりける、荒灘はむくりをに
 やし、詞「ヨリヤ是程にわめいても返事もせぬは寝入ておるな、うぬら
 が役は何だと思ふ、御門の明立する計で御扶持をくらつておるでは
 さいか、其殿の御歸館に、たわいもない寝とばけめらと性根付すば
 荒灘が門打碎ひて御供せうか、よくどうめらとどつてう聲、俄に騒ぐ
 御門内さつと一度に高挑灯はせ違ふ人音足音思かけあく表は胸り、
 門内より聲高く、御門番は伊達次郎明衡、子細あつて相勤る所に理不
 盡に門を開け何ぞとは何者成不、先直に名を名乗と、詞に驚天荒灘
 がはやてに逢し心地にて皆く答へもなかりけり、詞「聞へた京童
 のざれ深く、出舍武士迎あぶるよな、急度詮議もすべけれど、一大事
 の評議最中其儘に打捨置、者共御門を嚴敷相守と、聲諸共にし
 める戸の、貫木入たる詞の錠、稻妻は氣をいため、詞「コレく荒灘、何

にもせよ我君を、館へ御入申さずば事の様子が氣遣ひを、裏門から御
 供せん、イザ御出と御手を取、高尾も共に氣もそいろ裾もほらく、
 踏かへす裏の御門へ急ぎ行廻れば道も遠目から、星をあざむく高挑
 灯、晝かと計人とは只うつとりと詠めいる、郷助は詮方あさ、御門
 の扉にひろく聲、詞「此御門はどなたのお固め、義綱公御歸館なれ
 共、表門は明衡殿御固め故御入叶ず、何卒密に此門より御入有様願
 入と、聲より早く高塚よりすつと見越は名も高き和泉小治郎定倉詞
 義綱公の御歸館とは心得ず、此定倉が主君と申、冠者太郎義綱公
 は五十四郡の御主、西に津島の冠者、東には伊達冠者、静謐の御代に
 は國の固め、戦場に出馬の時は百万騎の大將たり、夫に何ぞや女童
 を引連て、よ、詞「我君を放埒也と世間へ流布させん爲、悪人共のは
 からひよな、錦戸貝田が知らせにて御家の重寶亂髪、刀紛失と追く

知らせ必定逆意の者共が騒に紛れ我君の、御身の程も覺束あし、詞
 君は館に、有共、なき共知ざるも又倭人原の心をさぐる一方便と、
 御門を固め此通り見れば足弱を連れ旅人と見ゆる、門前にうる付て
 人に見咎められぬ様、早く立去くと、子細有げな定倉が、詞と共
 に門内もひつそと、まづまり音もあし、人々案に相違して、心をい
 たひる其中に、寐はれ聲成義綱公、詞御家老衆の例の堅三、大切が
 る此門も、島原の大門程には我等嬉しう思はぬく、又、出口は
 和らかみが格別、されば廊中先生立の御たくせんに、都島原出口の
 柳、かろやれく此柳、サツサ、かそやれ此柳、詞などどやつた所はた
 まらぬくと、現たわいもあかりけり、透を窺ひ荒灘が義綱目掛振
 刀、目早く稻妻引ずりのけ、詞心得ぬ風之助、大恩の御主君を討
 奉る極悪人、コリヤ、うぬ誰ぞに頼れたる、知た事頼れたが、夫を

己に言物か、打放した跡でいふて聞そふ先うぬからと、切込刀、ま
 つかせ合點と扱合せ、打合打合ふ白刃と白刃、電光石火稻妻が手練
 に刀打落され、逃行荒灘後げさ二ツに成て死てけり、ホ、適手柄と小
 治郎定倉、詞當坐の褒美と投こす一通、詞委細は夫に早行と、詞は
 何か白刃の血、一先爰を高尾様、アイくどかいしよげに小づま引上
 我妻の御手を引もあまめける姿の盛り花紅葉、色にたわいも現なる、
 君を伴ふ稻妻が忠義は今に

伽羅千代萩

○第三段

謀計は一端の理潤、神明町に一構は貝田勘解由直勝が屋敷義綱公の館の内分て目に立花麗の作り、手を盡したる奥の間は、浮べる雲の金襖龍につばさの出頭は、誰ならぶべくも見へざりけり、ちよつと掃のも四五人が草臥る程廣い間に、せまい女氣陰の間の奉公帯持ながら、お綱、此様に朝から晩迄開いゝ屋敷が、廣い京にも有りやせまい、爰から近い北野様へ、一寸と参る事さへ叶はぬ、とせはしい中へ心もなふ、錦戸刑部様が、三日に上ずお出なされて、旦那様と園の内、何やら二人さしむかい、人にお隠しなさるゝはどろでろくな事では有まい、チ、ろくでない事云ふならお館様はうかく

伽羅先代萩

と傾城を買過し、此間から行衛が知ず、お大名の欠落でも、鎗長刀の持人はなし、お供の衆は有まいし、アおぶあひ事じやあいかいのふ、ハンニ 夫あぶあひ次手にこちらの若旦那、船岡山の歸りがけ松島様におはぐれあされ蓮臺野の片わきで、狼に取まかれてござつたを、漸く連ましてお歸りあされた、まかし狼で仕合、ア、うつくしむ若旦那、狐あぶあひ取巻たら跡がきづ物に成のふおむつ、サレナイ、どこに思ひ入が有か、熊川とやら云こはい顔赤人に、狐が付てそゝる事、夫を祈まづめると狸の様な山伏がにくてらしい高慢顔、狐やら、狸やら、狼やらであへかへす、詞狼より恐しい、旦那様のお目玉を貰はぬ様と段々に掃除仕あから次へ行、襖明るとすり足し、脇目もふら源之助、屋敷の内もあぶくくと苦は色かへぬ松島が、跡に付添立出れば、詞隠もない大名、太郎冠者有かやい、く、きたか、く、

お前にといふのじやわいのふ、ア、覺の悪い人、ア一度初手から仕直そふ、ア、早く立ちやいのふ、ア、くそんならあを致しませう、夕べお前が行衛あぶお成なされた其時に、はつと思ふた悲しさど、れ歸りなされた嬉しさど、何やらかやらで持病の癩、ちつどの間お待なされ、お氣がつきたらお菓子でも、詞、ア、くはしうない構やんあ、きつふ癩が痛なら灸をすへてやらふかや、ア、あついがしんぼらしやるかど、云ふ顔つくく、詠め、嬉む今の其お詞、夫婦と思し召ばこそ、おろかしいお心にもたんと案じて、下さんす、思ひ出すもあぢきない、お爺様と爺様が云約束のない先から、私が心に極めた殿御、女冥加に叶ふたのじやど、思ふ内早むつび月、祝言をして程もあふ健忘とやら云病ひ、神や佛のお力で御本腹は遊ばしても、御一門のお出合に、つまらぬ事をおつしやる度、おいとしぬやら、悲しいや

ら、此後迎もあなごられ、住かひもないお身の上思ひやられて悲し
 むと悔涙の折からに、奥よりしづく、出来るは明衡が一子千賀之
 助、りつばに立旅装束、松島見るより是はく、詞直様お立遊
 ばすか、此頃何かに取紛れ、とはせの多もした、めせ、國では兄弟
 同然に中のよかつた文字摺様、お前がお向へ遊ばせば私か爲には
 大事の姉様、どなた様へもお前から、いかにもく、誰へもよき
 に傳ん、源之助にも御堅固にと、いへさうつかり氣の毒を、紛らす
 松島勝手口、連て見送り出て行、詞直様是からおれが一人遊び、鼓も
 太鼓も爰に有と、習ふた事は氣どくにも、鼓取上聲はり上、抑是は
 桓武天皇九代の後胤平の知盛、幽霊あり、詞直様、わしが好の強い伯
 父様が出てござつた、詞直様、面白い、打物業にて叶ふまじと
 敷珠さらりと押もんで、跡より出る奇妙院、詞直様、いか成天魔神成

共、祈ふせんを眼付、さよろく目して熊川が、何を聞てか高笑ひ、
 詞直様、ねかしいく、日比堅い顔してゐる、六條の左近殿が、聖
 護院のお辰女郎を嫁に取、詞直様、取持に行ずば成まい、先盃は三と
 九度、祝儀も濟で床の内、しめてからみじ藤の森、松の千年と契し
 を小女郎が聞て倍氣の焼餅一つ參れ兵衛殿、ま一つ參れ兵衛殿、マ
 伯父様其餅くたか、マ、きたあ、北野を過て柏野や、思ひ内野に有は
 ころ、つめつた跡の紫野、後は互に陸言の、未來を契る蓮臺野、
 小づま引上引しめて、裾はひらく平野の宮へ、思ひあらく七野
 の社、縁を切とは、詞直様、さふよくじや、わしや何ぼでも放りやせぬ、
 殺して置て行かしやんせと、泣つ笑いつ現なくとんとたをれて高野
 奇妙院は一心不亂祈れと印有されば、源之助はきいつかし、詞直様、
 んも山伏じや、二人白面ふ遊ぶのに、己が邪魔をしをるので、伯父

様もつゝい寐入た、サアとつと、歸れ、歸るまい、貝田殿の頼によつて、此病人を本性にする若輩者の知る事あらせ、だまつてねるとねめ付る、ワナイ病人を直すは若輩者様とやはい、わいらがうんち事したて、一つも聞事じやない、邪魔に成早ふ歸れ、シヤこじやく成すでつちめ、某が術を以て空飛鳥も祈落す、世事にわからぬ大馬鹿に云聞すには及ばね共、刑部殿の頼により、義綱の曲輪通ひ、伽羅の下駄に呪咀のもんを書はかせたる故にころ、真心蕩て本性を、まのた是を直さんには、懐中したる秘書の二巻、此中に一つの良薬、是を吞せば義綱も、元の通にた、敷成、かく万事に渡る某、ちみもふりやうをぢりぢけんは、掌をもつて大地を打よりいと安し、イテく印を見せんとて、又いら高を押もめば、源之助は撥追取、ワナイ今の蛇身を祈る上は、何の恨か有明のつさがねてろ、すはく動く不祈

れた、引やでんでに千手のだらに不動のじくのけ、明王の火るんの黒烟を立てぞ祈りけり、祈いのられ源五兵衛、恐しやみてぐらに、二十番神ましくてもうりやう鬼神はげがらはしや、出よくと責給ふぞや、腹立やくるしやと、奇妙院が首筋掴み座敷へどふと投付て、おほい重なる肥満のからだ大山をおふたるごとくゆびをかいめん様もあく苦しむ内に、聲高く、尋てもく、此上嵐の雲に乗て龍女は南方に飛去行ば、龍神は、猿澤の池の青波蹴立ててめつたむせうに踏付られ目口をはつて奇妙院其儘息は絶にけり、詞、是からはおれが居間、其山伏を人形にして遊ばふでは有まいかと、云内よりも死骸をさし上、詞中のくのの小法師はなせ背がひくいず、まのつから高いはく、氣の抜たのと氣違と、誰に心も奥の間の襖押明入にけり斯と様子も白書院、入來る渡會銀兵衛大場道益伴

ひて、座敷へ直れば、夫と案内に貝田勘解由、詞、渡會殿御大儀千萬、シ、彼一と品は調ひましたかな、いかにも、委細篤と此道益老に相頼み事成就の後は新地千石、證人は此銀兵衛則ち證文も渡置、道益老、最前御頼申た通り調合の彼毒藥、勘解由殿へ御渡し有と、差圖に道益近く摺寄、詞お頼の彼毒藥は我等が家に傳はる秘法醫の道は仁術にて人の命をたつ事は醫家にはかたき禁なれ共、國の爲との御事故調合は致せ共、先何人に此藥御用おさるゝや承て上の事と不審る顔色、詞、尤の尋、國の爲め、家の爲、其毒藥を用るは若殿鶴喜代君、と、とは又何故、錦戸刑部殿に此家國を押領させ我も諸共に國郡の主と成、榮耀榮花をせん計略、銘々が國の爲め、鶴喜代君に毒藥とはお國を亂さん國賊共、長袖なれ共忠義は忘れぬ大場道益、知行にはだされ非義非道に組せんや、穢らはじき奴原

と暫時も同席勿体なやと、つゝ立上るを、銀兵衛が立ふさがつてとこへ、詞、大事を聞せ歸さふやと留てもいつかな一てん老人貝田が扱打後げさ、すぐにといめの一急ぐり、詞、時代に合ぬ忠義立聲得心した迎も打放さでは後日の難と、懷中さがし取出す包、詞、銀兵衛、此一包は貴殿に渡す、兼てしめし合せし通、早く、委細承知仕る、追付吉左右お知らせと館をさしてかけり行、跡に勘解由は血押拭ひ、死骸片手に蹴上る壁さわらぬ躰にかたへなる、だいの釜へ打込毒藥元のごとくに蓋取繕ひ、詞、松島、夫にお居やるか、松島、と呼聲に、あいと返事も合の間の、襖押明手を突ば、詞、嫁そちや先程よりうここに居るか、何を様子を聞たか見たか、い、何にも、知らぬじや迄、詞、松島、今朝より何かと用事しげくはつとりとたいくつした幸の釜のたぎりそちが手まへで薄茶一ぶく、

立てくりやれと底意有、舅の詞松島が、立寄振の紅ひの、あけをう
 ばふや、紫の、ふくさばさもしはらしく、立る茶せんのおはより
 も、先へさへ行命とは心も付ず氣も付ず、行儀た敷差出す、茶碗
 取上貝田勘解由とくと詠、詞、色も變せずちつ共怪しき躰もなごは、
 奇妙の秘法、嬉しや此毒藥を膳部に加へす、めなば、鶴喜代
 即時に落命、心地よやと高笑ひ、聞て恟り松島が、心は千々に
 浮島や水にたいよふ思ひあり、詞、松島迎もの事に此薄茶、其方
 うこにて獨ふくせい、驚く事はあ、其方が父伊達明衡は義綱
 の一族、忠義立する老ぼれめ、鶴喜代を毒害しても刑部殿へ國の政
 道仰付られさ内、事露顯せば大望の妨、現在明衡が娘の其方、
 生て置ては夜が寐られぬ、様子聞ふが聞まいが、さふで助ぬそち
 が命、其毒藥を心見て、死で見せるが舅へ孝行、吞め、くらへと

舅の詞、思ひがけなき松島は、暫し十方に呉けるが、漸に顔を上、
 明衡が娘の私若君様の毒害を、と、様へ洩るふかと、思召てのお
 疑ひ、無理とはさらく存じませぬと、姫御世の身は生れてより三界
 に家おしとやら、夫を神共佛共、大事にするが世の教へ、其夫の父上
 様眞實はんの爺様より、御大切に思ふ物たとへどふし九事にもせよ、
 れ身の御難に成事を、何の人に洩そふぞ。未練に命おしい共見ぢん
 思ひはせぬけれど、心に掛るは我夫の愚かしのお心故女夫といふ名
 計に、ついに一度の添寐さへ、馴染程猶ぐはんせない、氣にも私を
 女房じやと、思ふてござるがおいとしい、離ともあひ死ともない、
 あんくの誓文で、詞人には云ぬ申ませぬ、命を助て給はれど、く
 どいつ泣つ、伏たがみ、伏拜ひ手に露甲、つとふ涙の瀧津浪、岩に
 せかる、風情あり、かゝる所へ渡會銀兵衛色眞青に駈來れば、勘解

由らつと見、詞、合點の行かぬ貴殿の顔色、首尾よく毒害仕おふせ
 しか、心許なし何とく、されば、真様館へ馳付膳番に示し
 合せ、臍部に残らず毒を入、仕濟せしと思ふ所に、イ、よい事には
 寸善尺魔、詞若殿の御手遊枝珊瑚珠の鉢植が、みぢんに割しは心得
 せと乳母政岡めやしめば、カ、強力者の節之助、正敷毒に偽いさし其
 類人を白状せよと、膳番川崎軍八が首筋擱んで手詰の場所、流石老
 功の刑部殿せさにせいなる風情にて、軍八を真二つ傍に居並ぶ近習
 小性婢茶道に至る迄、十人計即座に手討、白状すべし手筋も切、只今
 評議真最中、いか、計ひ申さんやと、青息といさうつたふれば、さ
 しもの貝田も溜息つき、詞、十が九つ仕おほせしに残念く、去あ
 がらすばやと刑部の計ひにて、詮議の根をたつたるは、適の働、ま
 かし、政岡松が枝さんと鶴喜代が傍を離れねば、事をはかるに便な

し、其毒薬を見出せしは、外に逆意の者有ると思はせんはからひな
 りと、返つて彼等に難題を云かけ、遠ざける謀計は刑部と兩人はか
 らはれよ、暫時も猶豫成がたし、早くく渡會は、又引かへしか
 けり行、詞嫁と、松島、斯仕おほせねば猶の事、彌命は助けられ
 ぬ覺悟して早く香め、アイ、香、アイくらはぬか死女郎、くど追廻さ
 れ、悲しさをつらと一世の瀬戸際、襖ぐはらりと源之助援手も見せず
 松島が、肩先すつばと切下る、ウンと計にかつばと伏、血刀逆手に取
 直しぐつと突込弓手のあばら、日比に替るりつばの覺悟、強氣の勘
 解由も胸り仰天、手負は苦し顔振上、詞、日比愚鈍の私が、かゝる
 有様父上の御不審は御尤、錦戸殿とまめし合せ、勿体なくも主君を
 失ひ、國を奪はん御くはだても、子孫の榮花にあらせん爲、其さざし
 をまづめん爲、いつぞやの大病を是幸と作りあはう、現なき身の行

作も、主人をかすめる冥罰は忤に、忽報ひしと先非を悔て本心にお成なざる事もやど、闘心を付れど此頃は、彌募る悪事の企、父は子の爲に隠し、子は父の爲に隠すと、古語に引かへ親と子の、心に隠しあふ、不忠不義の御心、諫言せんにも情なや、闘明衛が娘松島、某が妻とすれば、女に引され大望の妨なすかと思さんかど、不便ながらも此ごとく、手に掛たるは女房の、縁に迷はぬ心のけつばく、仕込に仕込し御企、思ふ圖のはづれしは、天道誠を照し給ふ、是目前の印ぞや、闘近き手本は船岡にて、鳥を取んと眼前の、欲に迷ひて山深く、難に逢たるまつ其ごとく、國郡の欲にふけり、我身を忘深入し、終には御身を亡し給はん淺間しや、父の悪事の根本は、私と云子故の闇、其迷ひの根葉をたつ、我生害は先祖代々、傳る貝田の家の苗字、けがさじ物と一心に思ひ込たる孝の道、心迷ひをふ

つゝと切、悪事を思ひ留つてたべと孝と忠義と二つ三つよはり行身の松島が、扱はさうしたお心か、そふとは知らず今迄も、御病氣故の現事、どふぞ本腹有様と鳥の泣ぬ日、有と泣て祈らぬ神様や、佛様迄御若勞をかけぬ願ひもなかりしに、今の立派なお詞を悦ぶ甲斐も情ない、此お姿は何事ぞ、此世の縁は薄く共、未來はやつぱり夫婦ぞやど、痛手もいとはず絶り付いたはる息も、絶へく頼少なき其風情、強氣不敵の貝田勘解由、闘ハ、ハチはさいたり不孝者、子が死ふが親が死ふが、思ひ込たる此大望、いつかあゝひるがへさぬ、親に逆らふ天罰にてくたばるは不孝の罰、思ひの儘に苦痛をひろげど、二人をばつと蹴飛ばし見返りもせず入にける、様子どつくと物影よりぬつと出たる源五兵衛、闘貝田が胸中合點行ず事を謀らん其爲に、狂氣の躰に何も角も聞扱たれば遁れぬ勘解由、イチ一掴と駈行勢

ひまなく待た源五兵衛殿と苦しさ懸取絶り、詞忠義にこつたる貴殿とは知たる故に法印が、工の次第あど打て、白状させしも我父の、百分が一の罪亡し、我も少しの忠義ぞや、詞主にうむく父勘解由果は刃の錆くすと、成給はんとは思へ共、眼前親の憂目をば、何と見て居られふぞ。相果る共魂は、四十九日が其間、此士を去ぬと聞ければ、死しても見ゆる我悲しみ、せめて暫しが内成共父の命を延てたべ、今はの際の願ぞや、コレ手を合す源五殿お情お慈悲と身を投伏歎けば共に松島が、合す両手も弱くと今を限りの二人が躰、孝心貞女の節義には、さしもに荒き熊川も、目をしばだ、き居たりしが佞悪邪智の貝田が倅に、斯も忠孝揃ひたる、適けなげの若者よ、親は子故に迷ひもせで子は親故に迷ひしよ、赦しがたき勘解由おれ共汝が孝心厚きにめんじ、げふの様子は何事も知らず覺ぬ氣違ひの、

目にはこぼさぬ一雨、有難涙末期の水、引取息も一時に、哀はかなき最期あり、ほろりとこぼす勇者の涙、まばる熊川庭先へ、貝田が下知にて數多の家來、ばらりと追取巻、詞價氣ちがひの源五兵衛、遁すやと叫び呼はつたり、詞、常の力に百倍増氣違ひ力の源五兵衛ならば手柄に留て見よと、庭へひらりと右左捕たど掛るを引寄せ、ばらりと二人礫、強力手練の働さに、コリヤ叶はぬと皆ちりり、思ひがけなき後より頭目當に打付る、釜のねつと毒氣にむせび思はず尻居にどつかと伏、透へ切込貝田が刀、請たる強力手水鉢、微塵にあさんと振上る、流石の貝田氣を吞れ逃入跡へ又むら、出合ふ大勢打付る石に打れて人の鮎、我身もどろとふし、染込毒氣に眼もくらみ勇氣も碎け無念の齒がみ、口惜しや残念や、やみくと毒薬に、命を果すかさつくはいや、此上

何千萬日本國が寄くる共死物狂ひのあれば死、敵の屋敷に我かばね、
 いつかな残さぬ人種の、有ん限りと氣をかため踏出す、足もたぢく
 くよはる兩足踏しめく、さゆる奴原はり退蹴殺し踏殺し、人
 なき原を行如く、万夫不當のどうけつも運盡の輪や熊川が武勇の程
 とそ「ゆゝしけれ

伽羅先代萩

○第四段

姫氏國と書し寶誌こそ四百餘州の粹ならん何國は有と取分て、都の
 水でみがさ上娘盛の品者が前垂たすき、かけまくも髮形さへ手品さ
 へ、和らかそふな豆腐やの、内を手傳ふ小息子が、水のたるのを焼
 立る、おかべ一重の隣には、何する人と白浪かまらとは見へぬ男ぶ
 り、され共此人晝をば何と鳥羽玉の、夜ならで目さめ給はぬは、い
 と不審多さすさわいなり、中間共侍共、わからぬ腰付せいひつ合羽、
 あたりうろく立留り、詞「浮世渡平は此宅お、在宿ならば御意得た
 し、詞「誰じややかましる、用が有あらわしたござれ、夕べのさ
 りを取に來たのか晩には是非共行程に、其時に一所に濟す、左様

の用事でよし、自他共に御意得たし、是是非逢ふ氣かそんから其戸を
 むつと押た、ついでしづかにしやうぞこばれ物がとんすぞや、アツコ
 老ゆびん引くりかへした倉相な人と、ぬつと出す顔はおかしう悪光
 素人の焼た樂焼の中にさる付目をすりく、門兵衛様扱すさまじ
 いふりでござります、うして、何不用でもござりますか、チ、サ、密の
 用事も有れば、内へ這入て其様子、興、内は雨が唯ぬけ、外の方が
 ましでござんす、然ば是で申付ん、主人錦戸刑部殿其方へお頼なされ
 たさは餘の義でもない、隣の豆腐屋は、傾城高尾が親里なれば、冠
 者太郎諸共に尋來らんは必定、其時には折を窺ひ人知す二人共に差
 殺し捨られよ、此義首尾よふ仕おふせあば某が吹擧して、侍に取立
 る、圓筒様の事を申付るも、先日屋敷で賭博の節、二三度の出會に汝
 が魂見ぬきし故一重に奉公はげまれよ、圓畏りました、隣の豆腐

屋は、高尾が、親里若も尋てこまい物でもなし、來た時には、ハ、
 氣遣ひさんすあ、びんばゆるぎもとせませぬ、扱小氣味のよい男、
 然らば随分手ぬかりなふ、万端貴殿を頼入、圓近日ゆるく御意得
 んど、詞は適万石取、腰に二刀さしこなす、銀拵へもうさんある、
 あまりちらして歸りけり、圓「よふお出なされました、コレ屋敷によい
 のが出来たら必知らして貰ひましょぞへ沙汰なしにしよまいぞへ、
 ア、まかしあいつも錢なしじや、ちつとまけると小言計、エ、あつたら
 夢を覺された、ま一寝入見しらうと、入より早く高調着のみ、着の儘
 氣さんじなり、圓「申重三様大分仕事のはかいいた、ちつと休んで
 下さんせ、圓「お構なされますな、女氣のない私が肉、湯じやの茶
 じやのと親子共、毎度お世話に成まする、其お禮でござります、
 七兵衛殿は病氣で宿へ下つていられるげあ其間は御遠慮さふお遣ひ

あざれて下さりませ、またよつ程此豆腐、手ついでに皆片付ませう、
 そんならとふして下さんせ、私も申をさいて仕舞ふ、申重三様、か
 うしてお前とかうあらんで此様にせい出すも世帯のけいとして見る
 と、ほんに嬉しうござんする、始て見初た其時に、いとらしいと
 思ふたが、癢を覺た始にて、まはらぬ筆の跡や先、譯のないのが縁
 のはし、夜すが求めて寐てうして、寐る度毎に可愛さの、十寸鏡取
 其隙も、寐た間も忘れた事はない、詞「ア、豆腐を其様に振廻すと、
 私が身内は眞白に、人の白あへが出来ます、ホニ嬉しぬお志、ちつ
 共仇には存ませぬ、元私ばちいさい時、餘所へ養子に参ましたが、先
 が皆死果て、此比親仁を尋て参り、一月餘り京都の住居、近所に馴
 染と云はなし、南無三豆腐を眞黒にした、ヨ、しんみといふは親仁計、
 御存の通のあ、云氣性、申お幾様へ此上ながらお頼申ます、あれま

だあんかかたくろしい、他人の様な事計れ前の心にかけてが有、聞
 かけでも何にもござりませぬ、ほんにかはゆふござります、其ござ
 りますがわたしやいや、らんなら可愛女房共、私が心は此焼豆腐、
 たどへ火の中水の底、詞「そりやはんく」でござんすか、幸酒も爰に有
 改めて内祝言、必虚を言しやんすな、詞何の虚を誰がいと、そんなら
 はんまにこちらの人、女房共、嬉しやと抱付、しめからみたる若藤や、
 若紫の若女夫面白盛花盛、詞「晝日中此様に、引ついても居ら
 れまい、お袋様は今朝から南禪寺の方丈様へ、雨もどふやらやみ
 そふち、幸豆腐も出来て有、詞お向ひがてらいてかふと、あぢに世
 話をば焼豆腐、提ていそ、出て行、日影はつらく、忍ぶ身は、薄
 におちて菅の袋、みかさど申せみさむらぬ、賤の姿にしよんばりと、
 高尾を先に義綱は、とある小影に立休らひ、高尾、冠者太郎義綱共

云る、身が、鳥おどしの様な形をして、そなたとかふして道行は、此
 比でない大當、今日の趣向を皆に見せたい、呼でこい、申殿
 様、爰が私が内、お入遊ばしませ、又此郷助殿は何してぞと、
 云つ、寄て簞笠をぬがせ申せば義綱公、すつと通つてたそいぬか
 く、爰へ来て足洗へ、ついにしてみぬ世話事で、今日は大分草臥
 た、早く早ふも夢現惚りしかがら娘のお幾手盥に汲豆腐の湯、お足
 にさはる和らかな、手先にふつと、鬨、むさい内に似合ぬきれいな
 娘、一夜の情をかけてくりやう悦べく、今の褒美に何をがな、チ、
 幸々今迄はいた、其下駄、あたしまりの有のを遣はすぞ、是が妹
 春のかための印、後日にいやと云さぬ様に、太鼓共が常にいふ、下
 駄をしつかり預たぞ、誰か有案内せいと、上座へ直るも千鳥足、
 門より高尾が、鬨、妹、久しぶりの姉が顔、見忘れはしやらぬか、

何の、忘れませう、姉様よふ来て下さんした、此間からお前の噂、
 とやかふ聞て案じたが、鬨お前の事を云出すと噂様の不機嫌、モッど
 とにどふしていやしやんすぞと案じぬ日はござんせぬ、噂様はさ
 つきながら、南禪寺の方丈様へ、いかしやんして留主なれば、お戻
 り次第よいやふに私がいはいはふ必あんじさしやんすあへ、チ、よふ云て
 たもつた、曲輪へいて逢ぬ中、マッおとなしうなりやつたの、夫さ
 ら噂様はお留主かや、イヤ、此お方は大事の御身跡からお供もくる程
 に、ちつとの間成と奥の間で、御休足さしましたいと、とふやら譯
 も有跡を、見て取お幾は手をつかへ、鬨見苦しけれど奥の間へ、イ
 御入と進められ、チ、いかふ、高尾もおじやと打連て、一間の内
 へ入給ふ、跡におくられて稻妻がいきせき、尋ぬる黄昏時、南禪寺の
 門前は爰かど人に、豆腐屋の、門をこそ爰行迷ふ、戻りかゝりし主

のお澤、申卒爾ながら物問ませうと、見合す顔、詞、ね前は神浪
 山左衛門様ではござりませぬか、こゝ様はお澤様、ア、ア、久しぶり
 でお達者な顔、お前も御無事でお嬉しや、ア、ア、こちへと我家の内、
 山左衛門取あへず、詞、ね澤殿、思ひ出せば十六年以前若氣の至
 りと女に馴染、因果と懐胎、生れ落すと女は相果、ア、いか様、ナ、若い
 お人のしはたらと、乳香子か、へうろくさつしやる氣の毒さ、し
 かも辰の年、辰の月辰の辰の刻の、ほんに珍らしい誕生、幸こち
 に乳も有、姉と一所に吞す内、斷もあふね前は家出めつるふな人
 じやなと思ふたが、死た佛の云しやるには、餘所の子を世話にする
 も、一方あらぬ他生の縁、必庵末に召るなど、夫婦して育る内、其
 愛らしさ可愛らしさ、いつ共なしにこちの娘、詞、成程其節我等旅よ
 り歸りた尋申せと行衛知れず、不思議な事で今日といふ今日、廻り

合たも古主の御恩、其娘は何と致したな、サ、ねあか一つ痛ませず、
 痘瘡麻疹もかるふ仕廻ひ、自慢じやあいが此かいわいに、ま一人と
 まいよい娘、ア、お前は何故に、ア、イ、拙者只今仕官の身稻妻郷助と
 名を改め、お主の供して此邊に、傾城高尾の親里尋、何とれつしや
 ります傾城高尾の親里を尋てか、イ、カ、モ、其高尾と云は、わしが娘のお
 種じやはいの、ア、そふとは知らいで是はしたり、コレしたり、コレし
 たりと絶て久しき名乗合と、ひとつとばれつ浮事のもる數々斷台様
 子聞るる娘のお幾、扱ははんまの爺様か、おなつかしやと取絶る、
 別程へし親子の名乗、流石強氣の郷助も、えんは泣き目に涙、大づ
 けなふて哀あり、母の聲ぞと聞よりも高尾は奥より走出、おあつか
 しや噴様、苦界の身の悲しさは、長の年月音信せず、よふまめでぬ
 下さんした、殿様のね世話にて曲輪を出し程もあふ、御身にせま

も浮難義習しの内の御不自由と大事の殿様お供してお前を目當に、
 聞「ふ、うんから何と云殿様のお供して、ふ、ふつさにから奥の間にど、
 聞て心も落付郷助何思ひけん母親は、高尾が手を取門の口、突出し
 て月をびつしやり、闘うなれば爰に置事あらぬ、とつちへ成共勝手
 に行ど、詞に悔り、詞、そりや又なせでござんするく、縦と
 ふ云事有共殿様の傍放れ、脇へ逆は行事いや、闘悪い事が有ならば
 堪忍して下さんせ、コレ、鼻様、詫言してたも妹と、おろく、涙ろ
 道理なり、詞妹構ふな神浪様もお構ひあされな、高尾科は其身に
 覺有筈、東國にて誰有ふ、肩をならぶる人もあさ冠者太郎義綱公の
 膝に入る所もなふ、見苦しいわばらやへお入さるは誰故じや、今
 こそは此身なれ共、古しるは高橋幸内教俊とて、秀衡公の御扶持人、
 いかに流浪したれば逆、現在の己故お家を亂し殿様に、御悪名付さ

せては、過行れた幸内殿、先祖へ對し云譯あし、御家中廣き其中に
 忠臣の武士有ば、己を殺して悪道の、根をたつ人の有もやせんと、
 母が覺悟は、爰にと、佛壇より取出す位牌、鬮俗名高尾と印せし
 は、けふは娘が殺さる、か明日は死骸を送かど、我子の死るを待兼
 るも、古主のお家が大切さ、夫もあの世で御主君へ心計の申譯、詞片
 時も殿様と御一所に置事あらぬ、うろたへて爰らに居ば、七生迄の勘
 當じやぞ、皆様奥へくと、母の詞は利の當然押して留ん様もあく
 跡に心は残れ共、是非あく奥へ入にけり、外にしよんばり、枯紅葉、思
 ひ高尾が兎やかうと、思案に思案定まらざ、闘、道欲じやわいあ、鼻
 様、殿様とお主とは私めよふ知てゐる、逢染てから二三度は御異見も
 したけれど、つい其内にいとしう成、一日お顔を見ぬ時は私は、人の
 心もあふ、な主も家來も打忘れ、夜毎く添ひぶしのあかぬ別れの

曉つきに、いのみと有を引どめて、つい夫なりに、居續が、こうじく
 てれん身の仇、皆私からの事なれば、いつろ身を投死ふにも、ねあか
 にやどした此や、は私が子なら、彦主様、死るにも死なれぬ身を、ふぞ
 夫迄堪忍して、お傍に置いて下さんせ、やいのくくと戸をたき、もた
 へこがれて泣居たり、内はひとつそとしづまりて、いらへなければ涙を
 どいめ、胸ア、そふじや何事も皆先世のごうと、傍見廻しひろる取、小石
 を、入る、袖袂、駈出さんとする後へ、ぬつと出たる浮世渡平、片手
 に高尾を驚擗我家の内へはふり込、其身も共に入相時、蚊の泣音さへ
 はそとくと、近所もれくる夜なへ歌、君と逢夜の、さよりは月夜、月
 も忍ぶか笠をめす、月も忍ぶか、笠をめす、胸ア、只今夫へ参ります、
 私ちと内證に用事を仕廻ふと直様夫へ、お袋の云る、一分始終尤
 せやが、若い女中を只一人外に置のはあふない物、高尾様くく

く、コトヤもふ爰に人氣はあ、氣遣ひあくと、いふて奥には
 女ばかり、此家を明て出られもせず、とふした物で有ふあ、いか様
 世界はあじな物、殿のお傍に付添て、片時放れぬあの高尾、義理詰
 に成たれば別れねばならぬしぎ、又十六年前に別れた娘、縁有ばこ
 と廻り合、切ても切ぬ血筋の縁、和泉の小治郎定倉殿、某へ密かの
 書面、此度ち、ぶの重忠公より彦状到來其趣は殿の彦身持上聞に達
 し、彦覺へ宜からず、去共先祖の戦功に感じ思召、義綱が放埒の元
 は傾城高尾故、此女の首を打一家中の心をかため、義綱を補佐すべ
 し、大將の彦前は重忠宜敷はからはんとの彦内意、其方は人知す、高
 尾を打てくれよとの事、おのれやれお家の爲と請合しが、長の年月我
 娘を世話にしてくれたお澤殿、其大恩の有人の眞實の娘の高尾、と
 云、是が殺されう、といふて助置時は定倉殿の詞も無足、何とし

た物で有ふ、我娘の、お幾、幸年も似合頭高尾殿、の身がはりに、
 とふじや、と立上り、思へば、因果な娘、生れた年は母に
 放れ、久しぶりで廻り逢爺親が殺すとは、いか成業か報かど、人目
 なければとふと伏聲を、立すの忍泣、表に人音一寸遁れせめて暫し
 の命もと、かばふは恩愛合の間の襖、引立入にけり、我家の内よりそ
 つと出る、渡平は跡のかけがねしめ、傍見廻し隣の内、入より早ふ
 高笑ひ、聞、お天氣でござります、倅はこなたにおりませぬ
 か、お袋様はかんさんか、なむまみた佛南無阿彌陀佛、コレ皆お
 留主かへ、としてお客でも有たかして盃や銚子鍋、エ、何かお、
 私に呑めと云事じやな、是は御馳走で御座ます、エ、肴には及び
 ませぬ、何じや田樂を拵へてくへ、忝ふござります、そんなら此
 間鍋も爰へ乗せ、コレ火がぬる炭を二ばい取てかうと、餘所の勝手

のくはしいは何國の浦でも寡の性根、我物いらす、じふのふに一ば
 いの炭、打明て、吹付る内ばつちりと、炭のはねるに胸りし、詞、
 けたいな炭じや、すでに顔を焼ふとした、おれが顔にやけどをした
 ら、玉子娘に成で有、何じやむまきさい、くは、能衆の巾の
 句ひがする、とこじやの、不思議や今此下駄のゑならぬ句ひ、
 最前使の詞と云、まさしく此家に冠者太郎、と一人うあづさ差
 足し、下駄取上て土打拂ひ、傍に人も内證の、明た戸棚を幸とそつ
 と這入て内から戸を、仕濟し「顔に忍び入、かくとはいさや白張の、
 行燈提て娘のお幾、裾もはら、立出て、詞此重三様は何してぞ、
 エ、人の思ふ様にもない、早ふ戻つてくれたがよいと、日にいく度
 か取上る、合せ鏡も引わくる、母は奥より立出て、詞お幾や、又髪
 をゆい直しやつたか、身だしなみをさつうしやるの、はんにそなた

に云たい事、ア、愛へ一寸おじや、コレ今迄とは違ふぞや、實の爺御の手前も有、あの様に育たかと思はるゝも耻しい、といふは重三殿とそきたの中、有まい事ではなけれ共、心の知ぬ、渡平殿、其息子の重三との縁組は、とふもつまらぬ物じやぞや、若い時の一盛、面白程あきも早い、コレわしが悪い事は云ぬ、ア一旦はのいて仕舞、末ではとふ共なるぞいのだ、母の異見を聞悲しさ、皆尤な御事なれと重三様と私が中、未だ迄もと云かはし、必退を退まいと、雛様迄を誓紙に入、かたい約束今更に退れぬ物かコレ噂様、是計は堪忍してどうぞ添して下さんせと、娘心の跡や先つまらぬ様でも義理は義理、立通す氣ぞ道理なる、奥より出る神浪は、母を押退お幾が胸ぐら取て引へす、阿、愛お恩知をのめらうめ、最前より始終の様子は皆聞た、大恩請たれ袋の、事を分たる今の異見、よふ口答ひろいだ

あ、コレ袋此娘にさつぱりと、勘當をして仕廻つしやれ、實の親の折檻は、どの様な物じやうぬ見れれと、娘を引立出る門口、阿、待た山左工門殿、血を分た高尾が身替り、義理有娘を殺さしては、此母が世間へとふも濟ぬ、ヤ、何と、簡程ゆゝしい騒動にさゝるな者の命をかばい、似首の事のあらはれたら義綱公の御身の上、高尾を殺して其首を、定倉殿のお目に掛、一家中のはぞを堅め、義綱公を御代に出さずば忠有者とは云はれまいぞや、尤もあれ共、こあたの娘と云、殊に腹には主人のお種、其高尾を殺す時は主殺しの悪名遁れず、コレ娘、そちが命を捨ればな、親は主君へ忠義と成、義綱公の御身も納る、養親の爲にも古主、コレ聞譯て命をくれい、とは云物の其方も、たましく逢て悦びし其日もさらす手にかけるも、先世からの定り事、親子のゑんもつき果ていつう合すに仕廻ふたら、殺す心

も有まいにさ中なかにに縁ゆかりつさず、廻り合ふと殺さるしは、因果の道理
 とわさらめて、こらへてくれよと聲を上わつと計に、泣居たる、娘
 は始終聞よりも、父が前に手をつかへ勿体ない其悔、お主のお役に
 立といひ、姉様のね身替りねがふてもさ身みの果報去ながら一つの
 お願ひ、どうぞ聞て下さんせ、詞早ふいへ、其お願ひと言の
 はな、身替りに成事を、暫く延て下さんせ、其内には噂様のねひへ
 も仕立て仕舞たし、七観音の其間、清水様へも参りたし、一月も
 四五年も、立ての上のお身替りど、何を言やらわけもあし、詞早より
 や已何を言のじや、最前より様どと、事を譯て言聞すに、こりやうぬ命が
 惜いのじやあ、エ、未練者め、ひさやう者と、刀すらりと振上る、娘
 はわつと飛退て、詞、早く申れ噂様、ア、爺様が私を切とひな、ア切れ
 ぬ様に詫言をして下さんせと、聲もしどるにふるひ居る、詞、ア、氣遣

しやんな殺さしやせぬ、コレ神浪殿、可愛うふに、アお幾はの、年端の
 行ぬ心にも、なさぬ中の義理立て、詞色に氣を付けてくれるもの、
 夫を知つて親の身で、繼子じや故に殺さしたと、どふ夫が見てゐら
 れふぞ、何ぼうでも身替りに、殺さぬ〜と、義理にかて付有
 様は、可愛さ餘る母の慈悲、詞、噂様嬉しうござんする、お前の影で
 助つた、つれなき爺様のふこわやと、遊行帯際引戻し、詞、エ、情ない
 恨性じやな、ア、科有て殺すから我が替りに此骸、一分だめしに刻
 まれても、見殺しにする物か、親は百倍惜けれど、殺さにやならぬ
 は人界の、義理と思とに責られし、おれが心を推量せよ、詞、いつ迄
 云ても詮なき事、覺悟せよと振上る、母はちつ共身を惜まず、詞、ア
 コレ、神浪殿、必りやうじせまいぞや、扱ね袋、悪い了簡逆も助
 ね彼が命、かばい立してけがせまいぞとじり〜と付廻す、ア、

堪忍して下さんせ噴様退て下さんすな、御氣遣ひ仕やん亦切しやせぬと、母は我子のおほひに成殺さすまいとかばふ親、忠義の爲に殺す親、思ひは二つ三つまたに水越計浮涙涙は陸奥の船も、浮めん風情なり●人に知られて詮なしと思ひ切ても手もたゆむ始終の様子、隣から聞居る高尾は身もよもあられず、走出て表の戸、碎けよ破よと打たへれば、かけがねはづれ開く戸の、としやおそしと我家の内、南無三寶と神浪が、へだつる母を及びこし、たぶさ掴んで提切に首をはつしと打落す、死骸に取付母娘、前後正体泣るたる心ぞ思ひやられたり、神浪も恩愛の、胸にせさくる涙を押へ、せめて死顔清めんと首引寄て取上る、たぶさに結込一通は、御爺様参る、幾よりと、聞より母は涙ながら、御ア、扱は覺悟の有たのか、但しは何ぞ望事、夫見せてと取絶る、御ア、イ、此様な未練者、死だ跡迄耻

さらしと、引さく手先に取絶りなふ縦未練な事有共、是に上こすかたみはない、私に讀して下さんせと、高尾が泣なく押開き、御松は千とせを盛とし、朝顔は一時を一期とし、何事も前生よりの定り事とあきらめたり、わたしが首を討、高尾様の身替りにあされんよし、其場に成たらなげさにわくれ、よもや得討なされまじと、態と憶病に成、比翼な最後を致し、機嫌を直され、只一遍の御るからのみ未來の頼に致し、見やしやんせ神浪殿、是れでも憶病者かいかふ、ひさやう者かいかのふ、くく、出かしたなく、チ、うふ云をちが心と知らず未練者、ひさやう者と云たのが、今では面目ないわい、ニ、娘よこらへてくれい、やい、噴様へや残こし、何と書て有ぞいのくく、西も東も覺ぬ時より、十年に餘る其間、なさぬ中のへだてもあふ、可愛がつて下さんした浮思も送らま

先立不幸の程、堪忍おされ下されい、モ、未來の喚様に逢たり共、や
つぱりわたしはお前様を眞實の噂様と存じり、マ、ろふ思ふてた
もるかいの、コレと迄も親子じや程に氣を慥かに成佛してたも
やく、取分心にかゝり、ハ高尾様の御事、頼上り、只一言
や上度事、御座いへ共、爺様の手前恥しく得書殘しやさず、よきに御
すいも、願ひ上い、マ事は山とあれど、心急れい、マ惜しき筆留め
たりと、讀む内父はそゝるなく、歎けば母は聲を上げ恥しむと書い
たのは重三殿の事、有、マ此母が吞込でぬる、コレ必迷ふてたも
んなや、思へば、カ可愛や貧しい中、ハはたらき何角に付て苦勞
さし、ハいつ花やかな事もなふ、ハ浮身の果は此様に、ハ親の手にかかけ殺す
とはいか、ハ成業か報ひかど、ハ親、ハ首に抱き付、ハ抱き付て伏せろべば高
尾も共に泣くす、ハぬれ前後正躰歎さしは理り、ハせめて哀あり、ハ戸棚

はらりと浮世渡平奥の一間に冠者太郎、ハ忝なしと駈行を、ハしつか
と取てとこへ、ハ義綱公の御座有とは、ハ何を證據と云せも果せ、
以前の下駄を取出し火鉢へおぐれば炎と、ハ匂ひは四方に薫じけり
聞、ハ其銘は薄紅ひ、ハ日本國中廣しといへども、ハ伽羅にて作れる下駄は
かんは、ハ義綱ならで何處に有、ハ小言いはすと、ハ爰放せと裾振切て駈
出せば、ハ是迄と切付る抜つく、ハいりつ死骸にて、ハ丁と請れば血はし
たり、ハ流込たる以前の間鍋、ハしてやつたりと引提て一間の内へ駈
込たり、ハ何國迄もと駈行を、ハ疾より窺ふ重三郎、ハ走入てさ、ハゆるを、
己も敵の廻し者くわんねんせいと切付る、ハ抜合して上段下段、ハ互に
手練打合しが、ハ重三郎は請太刀も、ハしどろになつてたぢ、ハ、
よろめく裾を蹴上られ、ハとふとまるぶをのつか、ハり、ハ胸元押へ只一
突の其勢ひ、ハ神浪山左衛門、ハ必はやまる事なかれど、ハ障子

をさつと義綱公、うやまい守護する渡平が有様、さしもの神浪胸り
 しあされて詞もなかりけり、嗣義綱公は嚴然と、嗣佞人共の計ひに
 て近頃より心亂、晝夜わかたず煙酒にふばれ、始て心付たる今日、
 國の爲に汝が娘殺害に及ぶ事、忠義とは言ながら、娘が最後不便や
 と、仰にはつと頭を下、嗣ハハハ、存難御仁心、娘を切りしは某が
 寸忠、恐れながら君の本心いか成故と尋れば、夫こそは此渡平、
 貝田がおこなふ邪術にて心まどはせ給ふ我君辰の年月揃ふ女の、肝
 の臓の血を取て、熱酒に合し伽羅にて煎じ是を差上、彼術を立所に
 塞事は、奇妙院が懐中の一巻にて我よく知る、此家の娘の血をもつ
 て我君に奉れば、ハハ、斯のごとく本心に成給ふ、最前高尾を手込
 せしも、あやまちをさせまい爲斯身をやつし守護する我は、熊川源
 五兵衛秀景、以後は互に申合さん、ハハ、適忠臣去ながら某稚

砌より、能見知たる熊川氏、似ても似付ぬ顔形、ハハ、是ころは館に
 て數多の組子をさゝゆる折柄、毒に當て此の如くそうごう替るは一
 つの方便、嗣傳へ聞晋の豫讓は漆をさして形をかゆる、我は夫には
 引かへて、敵よりろく毒薬は、かへつて味方の天のたまもの、味
 方顔して敵の計畧、一とにつげ知らさんは我方寸の内に有、ハハ、嬉
 しや悦ばしと、勇立たる有様は實もゆゑ敷忠臣なり、嗣ヲ、頼もし
 かたぐ、去ながら先祖より傳はる政宗の刀、紛失するも我誤り、
 二度代をしる心はあし、松ヶ枝節之助を付置て、鶴喜代に世を譲、是
 よりは程近き加茂川に隣たる砂川に屋敷を建、我と我身を押込隠居
 嗣御尤成御詞、高尾殿も諸共に御供をさせ申さんが、一所に置ば諸
 家中の、心揃はず身替りも詮なき事に成果ん、ヤア、倅重三郎、高尾
 殿を同道し、近江路へ立越て、眞野の知るべに身を忍べ、嗣ハ、畏

り奉るしかし難義は高尾殿、若輩の某が一所に連れて立退ば、高尾が誠にかたらしいしは重三郎と流布せんか、よし悪せつも忠義故、さゝるな事はかへり見せ佐人亡びて其後は、高尾殿の替りに死せし、れ幾が爲の初發心、行衛定め修行の身、夕べは川に浪枕、あしたは土手に身をこらし名を銅鉄と改めて一字の寺を建立せん、詞、實頼もしき志、娘が爲の善知識、我は是より此首を定倉殿へ持参して、まぢく成し一家中のほぞを堅る忠義の門出、イれ暇と立出る、母は引留おふ暫し、けふはいかなる日成ぞや、一人の娘に生別一人の娘に死別れ跡に残て老の身は、何とかならん浮草の、浮世に秋の紅葉ちる、高尾も共にくゞと、歸らぬ歎き人々も、しほる、心取直し、振切袖や濡る袖、包涙は身に餘る義理と、恩義と忠義とに別れくゞて「出て行

伽羅先代萩

○第五段

王城の隣に並ぶ上郡は、目出度御代に近江路や、蕪川魚湯水に、事か、ぬ國唐崎も、矢矧も比良も、目に付す、錦戸刑部が家來大木戸門兵衛、大勢引連濱邊の砂道、詞家來共参れ、言聞す子細有、コリヤ、渡平汝も篤と聞、主人刑部殿、大望の御企、コリヤ、早儕等も知る所、貝田殿の計ひにて冠者太郎義綱も、砂川の屋敷へ押込隠居、鶴喜代も手術を以自滅さするに間はあし、時に彼高尾が事、定倉が計ひにて首討せしと風聞有共、其沙汰さだか成ざる所に、重三郎と言やつが、高尾を連れて近江路へ立退と聞者が知らせに某を召れ、汝は是より近江路へ立越、義綱の種を懐だ高尾、切殺し立歸れ、敵の末は根

をからすとの仰付、夫故に御覽の一腰をたまはる、コリヤ主人の御重寶指添成共波の平行安、斯も御恩に預る某、此事屋敷で語らんにも餘り過急い事成故、爰迄一またげ、近江路と聞た計、雲を摺む尋者、いつ迄からん程も知れず、夫故路金はふんだくにたくはへたり、詞此所迄くる路にて高尾くさい者を見ず、縦高尾に逢たり共生物を殺す事某は大不得手夫故汝を召連たり、ヤレくしんぞい息が切る、皆も休めと大道に、主がすはれば家來共同し座席にゐならびて、詞ア、大きな池じやあ、ソマの爰は何と云所、イ是が彼近江八景の中、堅田の浮御堂でござります、早爰は近江路を、聞しにまざる風景く、堅田の浦の釣小船、浪にもまる、イとく也と、古い書物で知たれ共目前見るは今が始、定めて此湖には、鯉や鮒が澤山成ん、うなぎ四五本はしぬな、肴にして一盃吞たら風景も一入な

らん、詞イ、其様な肴は澤山、時に寄と八九尺から一丈餘りの鯉が取ます、扱ゑらぬ物が取れるな、其様な肴は氣味が悪ふて喰まい、又氣味の悪い事を云なら、此所は川童原、何時共ふ化て出て、老若男女のわかちなく彼裏門を念がけます、イ其川童は晝でも出るか、イ、日中には出ませぬが、日の暮前からそろく、イ、是は又ひよんを所へ來合したはい、イ、お氣遣ひなされますな、私は爰らの生れ氏子には手ざしもせず、其川童の親玉は即此浮御堂様、ア、何と云ふ浮御堂の氏子がいれば川童、ア、れ川童様はお構ひさされぬか、夫でもどうやら氣味が悪い、しかし日暮迄は間も有ん、コリヤ、來共何をうつかり、其方共は此近邊高尾が行衛詮議して、日暮前に早ふ歸れ、早く、コリヤ、小人數なりと見こあして裏門好みの川童殿に、穴取れては叶はぬぞ、急げくと、けんべいに、主と山路へ家

來共、常どもなしに尋行、龜イ何渡平、浮御堂へ參詣し武運長久祈
ん間、身に續て參れ

○道行夏野野さらし井

世の浮め、見へぬ山路へいらんには、思ふ人こそはだしなれ、はだ
しの種を身に持て、馴ぬ旅路の、旅はいき、わらぢ引しめくして、
登る坂道爪先の、高尾を連て重三郎、都をつとに置別心は跡に引さ
る、牛石めてに行末は、何とかあらん道草も、泣てしはれてたど
くと、せめて暫しは逢ふと見る夢路に泊る宿もがな、つもりく
し浮事の、近江路さして「たどり行、人目堤をふたり連、樵る、童が
打ひれて、若い女夫と悪口も、何の儘よと聞捨に山中の宿打過て峠は
るかに見おるせば、誰かしらべん琵琶の海、操とるとさ細道を、分つ
く來つ、行がてに、在の女夫が打まじり、中よさうふな連ぶしに、

一つくすやに、四季の花、すいな水仙室咲の梅、いとしかわひ
に撫子の、よれのもつれつ糸櫻、垣根卯の花杜若、からさは歌の夫
婦合、可愛らしいむやないかいな、こちのひいさと、ふたりしつば
り抱柏、返事菊蝶ひよくにぬはせ、すいたかん菊四つ紅葉、行つ戻
りつ香の圖の、戀に戀わび瀧登り、笹りんどうの二つ紋、可愛らし
いじやないかいな、ひなもかはらぬ妹脊中、ア浦山し我迎も、勤氣
はなれ殿様と、逢夜重る、鶺鴒の橋もどたへて此様に、つらい別の其
上に、妹迎もむむらしい、はかない事もわたし故、嗚か、様も今頃
は泣て計りござんしやう、世を忍び住命さへ浮事つもる身の上に、
又此末はいかあらんと、返らぬ事をくごくとかこち歎くぞ道理な
れ、重三郎も諸共に過し夜すがの事共を、思ひついで俱涙、歩兼
て居たりけり、詞護國寺山内辨才天建立、辨天坊あじろ笠、鼠の

麻衣木もめんの白布子、てつかう股引り、しげに、建立箱背におひ
 子供にはやされて、よそめは二本棒、誠は行坊つよいぼう、りん打
 ならし町くを大福長者をさぶくる利生のそつそ坊、そそそ、そそく
 さ、來かゝる道筋に見合す顔は、詞、兩攀様、ほんにお前は高尾様
 袈裟衣から時非時のと、常住た世話に成ました、私が爲の一旦那
 跡の月から行衛しれず、詞方と尋に出ましたか思ひがけないよい所
 で、是から愚僧もお供する、見れば大分泣た顔、なせうさくどな
 されぬぞ、そそそ夫く覺てござりませう、お前様とよし様と、お
 じち座敷へ此坊主、わたまの様にまん丸ふ、挨拶をして床の内、お
 わたしも云が、り、背中合して寐て居ても、つい夫ありにはりよお
 ふ、中直りすりや、明の鐘にくふてならぬ鳥の聲、何の鳥が意地悪
 で、泣じやなけれとさぬぐの、いませともない心から、し、ちつ共

離がね、身仕舞部やへよし様を、引すつてめて其時に、眉も引すに
 かね付てよふ似合たか見てくれ、こつちへよりな、嬉しと傍へ
 引寄引しめて、ふたりの顔を一面の鏡に寫し見た物を、今は夫には
 引かへて、いつの月日にあふ事も、しらぬ田舎へしらぬ道、事とふ
 人も夏の日、かわかぬ袖の浮涙、かはひと思ふて下さんせと、歎
 く涙は道もせの小川に、水や増しぬらん、ふたりも俱に、露涙しほ
 る、心取直し、必ず歎給ふなよ、頓て彦代にさし奉り、ひとつ枕に
 逢の手の歌の唱歌も色めきて、あじな縁から、つめなれ染て、すへ
 の約束かため枕、かわらぬちざりと思はんせ、夫うれがほんかい
 な、つとめくも、ついなれ染て、寝るに寝られぬうた、ねまくら、
 あいたさ見たさは皆一つ、夫れがほんかいな、ほんに浮世は儘あ
 ちぬ、日、山の端におちこちの落人と人や見とがめん、いご

せ給へと手を取つて、急ぐ道筋程もなくむれる鷹のつばさへ、頼
 ん方も片だより堅田の浦にぞ着にけり
 近江路は餘所の國より涼しさの、まさる憂身の浮御堂、こゝたに暫
 し立休らひ、詞申高尾様道筋逆も油断がならぬ、是から眞野へは
 程もあし、知るべの方へ急かんと皆打連て行廻ふ人、とくより待得
 し大木戸門兵衛渡平諸共顯れ出、詞申夫へ打せ給ふは都島原に隠
 れなき、三浦屋の至盛大夫高尾の君と見しは僻目か、まさなる敵
 に後を見せ給ふか、歸し合して勝負有、斯申す某は關八州に隠さ
 大木戸門兵衛臂利なりしはさせ給へと呼はつたり、重三郎は物をも
 云す一腰抜て切付れば、請合して丁々切合後兩攀に渡平は何かさ
 やけば心得傍見廻して、駈入間もあら笑止や、門兵衛刀打折れ、
 しどろに成て、渡平、詞兩人共、搦捕、取逃しては汝が科、詞つ

がふたあらかぶなど、口は達者に雲霞、砂道蹴立逃たりけり渡平の
 しづく身拵へ、傍へ立寄り重三郎、親人、コリヤ何にも云さ、コレか
 ふくど、合點かど二打三打、打合ふ体にて程能所、捕たはど用
 意の早繩、コレと立寄高尾も共に、同く掛る三寸繩二人を引立つ、立
 ば、遠目にかくと大木戸門兵衛走、歸つて手柄く、某程の
 武士なれど、敵に刀を打折られ逃るではない引しりぞく、詞「コリヤ是恥
 に似て恥に非せ往時檀の浦の戦ひ、箕尾谷四郎國俊、景清に刀打折
 られ少し打へ引しりさしを、誰か一人憶病とやいはん、今の代迄
 の美談ならずや、や、最よござります、お前の耻じやござりませぬ
 よ、此二人はど致しませう、知た事都へ引、是はしたりげうさ
 んな、申、此邊に知るべの有奴原、取歸されたら詮ない事、いつ
 り、二人を切殺し首にして歸りましよ、妙計く、然らば貴殿御苦

勢ながら、フ、イ、待よ、最前も云通、生者殺すは大きな嫌ひまして
 や是は人の首、目の前で切を見たら、忽身共持病の癢、聞、イヤくやは
 り京での事、ハ、扱埒の明ぬ、ハ、私がたつた一討、お前様も夫程こは
 くば、そちらむいて目をふらいでござりませ、妙計く、然らば仰
 は任さんと、両袖顔に押當てあちらむいたる其隙に、二人の繩をど
 きはとさ又もさ、やささ、やけば二人はかしてへ忍ぶ内、傍の畑見
 廻して、西瓜を二つばつさりの、音にさいやり、聞、南無阿彌陀佛南
 無妙法蓮華經、浮世氏く、二人の者を仕止たか、何の苦もさくさ
 つぶりと、サ、お改めなされませ、のふいやな事くもふ見すとよ
 しにせふ、是は又比興千万夫でも武士と云はれますか、ハ、見やふか
 の、ハ、氣のさい物じや、しかしこはい所を見るも生命、去ながら、
 首實檢には古實有と、両手を顔のお、ひにし、指の間よりさしのぞ

き、聞、ハ、いか様、ハ、生顔と死顔はさうがうの替る物、今迄の二人共、
 おでやかか顔ありしに、虚氣味悪く眞青に、少し赤みの見へたるは
 血の流たる所ならん、切口の立派さは適勇く敷手の内や、聞、待よ
 待なさいよ、いかに切た首じや、目鼻も口も何にもなふ、ずんべ
 ら坊主の此切首、俄に澹はかくまいし、斯も形の替りしは、ハ、
 合點の行ぬ事じやなど、諸手を組暫し、見とれて、聞、西瓜じや、ハ、
 何と、ハ、はんに西瓜じや、ハ、不思議を、たつた今二人の首、打放し
 て間もさふ、西瓜に成たは、コリヤ、とふじや、門兵衛様く、ハ、コリヤ、只事じ
 やござりませぬ、浮御堂の近邊で、血をあへした其咎かろう、日
 暮に成て来た、れ川童様も出やしやる時分、御用心をさされませ、
 扱はそふ云事かいやい、夫じやによつて首打事ハ、よしてくれろ
 と云たのに、とふやら空も曇つてくる、コリヤ、渡平、まらとこちらへ

寄てくれと、そこら眺める其折ふし、追々歸る家來共、旦那、廻り
と飛退、申す私は何にも致ませぬ渡平が業で御ざります、御免く
と手を合せ、拜み廻りてふるい居る、是はく正躰なき旦那の有様
人の見る目も恥給へ、コレ申、家來共でござります、何家來共、うふ云
て身共を化すので有ふ、誓文く、家來共でござります、くはん
に家來だ、ヤ、うぬら言語道斷不屈者歸つたら歸つたとそつと云ばよ
い事を、周章しうぬかしたで、武士の有まじい、肝をなたぬにして
退た、身が目通には一人も叶ぬ、何國へ成共立去と云所なれど今は
云ぬ、餓鬼も人数じや、わいらでも力に成、コレ最前聞た、ナツレお川童
様のね祟かして、何やらかやら怪しい事だらけ、く一時も早急
がんと、立歸らんとする折ふし、時分はよしと重三郎、浮御堂の時
太鼓、しどろ拍子に打立れば、ソツ、皆く腰も拔、うろたへ廻る目先へ

ずつと顯はれ出し兩攀が、抑、是は浦島太郎十代の後胤川童の冠者乗
好なり、フ、うらめしや腹立や、眞汝神慮を恐れもせず血をあらした
る咎によつて、早く命を召取なり、貴殿のひどふの情所、我神變に
吸取て、穴じやう往生さしてやる、エ、氣味の悪い、コレ渡平殿、貴様
はああなたの氏子とやら、どふぞお詫をして下され、成程く、元は
お前の業でもない、主命故の魚相されど、かう見た所がよつ程さつ
わね腹立の様子、逐一通りでは合點はなされまい、ハ、どうした物で
有、コレござりますか、有、夫をあなたへさし上て、お詫言をして
見ませよ、イヤ、申川童の冠者様、畢竟是は間違ひ事、あの者が申す
は近比は、いかりな事ながら、少く持合せの金も有ば、夫をお前に皆
止ます程に、どうぞ御了簡下さります様と、フ、氣の毒な物でござり
ます、私を段々頼まず、今申た其金を皆取て、堪忍しておやりさ

れませ、イ金銀は人間の寶川童道には有て益あし、詞只金銀の其金の後の方におはします、彼レ今の情所が所望なり、ア、悲しやどふやらおろどがくすぐつたい、コ家來共下の帶を急度しめて、裏門口を用心せい、武士の有まじい、屋敷を餘り急いだで、不斷の儘の越中禪、ままりがふて便あいと、主も家來も懐へ、手を入しめる下の帶、下心有浮世渡平、さやつ出家だけ欲氣あし、物を云しては悪からんと傍へ立寄うやく敷も、詞うすくうさすはもふ、ささかちんぶりかくさんさんにやうらい、とらやあくと低頭平身、あしければ、譯は知ねどさやう者、出たりめせりふの唐詞、詞しやうらいにいつうはてれんてう、かすてらやうかんのせたんけい、聞より渡平はこなたへ歸り、詞あなた様には龍宮育、日本詞をお遣ひあさるりや、どふでも勝手が違ふ故、御苦勞あだけ腹立もさつ、うこ

で今の様に龍宮詞で請答、先は神慮を宥て置た、時に只今おつしやつたは、地獄の沙汰も金とやら、龍宮界も有様は去々年の大飢饉で、米が百に四合五勺、其わけく故さつつまり、成程路金を皆おこせ、又お前の大事の物を、今の金と一所に上たら、今の穴錠往生は敷してやろとの御たくせん、サ早ふお上あされませ、ス何と云ぞ、貯た路銀と、外に大事の物と云は、チ主人よりたまはつたる此指添、二色さへ差上れば、御了簡下さるか忝しくと、懐中さがしこてくと、取出す肌うちがへ、有たけこたけ、指添共に、一つに掴み、詞、是をあなたへ上てくれ、一時も早いがいぞ、コ浮世く、コお待よ、侍の事なれば、腰の物はあくてもよいが、折入て相談が有、爰から京へは餘程の道でござんすは、コうんと云なく、承知かく、此金を皆上ては、コうんと云なく、承知か

く、そばを一膳くふ事があらぬは、うんと云なく、承知か
 く、爰はとふぞお情じやが、南籙一片残されまいかな、けちな
 神に物を格と、忍罰をお當なさる、罰をお當なさるか、是非
 非もない事じやあ、そんなら南籙とは云まい、あなたの名にかた
 せつて、川童六十四文は成まいかの、一文もさかも成ませぬ、
 一文も叶はぬか、はつと計に聲を上、かつばと伏と云事は、此時
 よりど始まりける、詞、ぐづくと、早ふお上なされと格がる物を
 無理無躰、引たくつてこなたに向ひ、青黄赤白黒、るりこん路孝
 茶中赤藏、おいてうかふたんだうんすん、辰と差し出せば、
 氣味悪うふに手に取て、胸かねんをとるんは嬉しんが、とらやら尻
 んがさうんばか、牛ヤ、門兵衛様、川童様の御機嫌
 が直たく、神明のうじゆの印には各方にとく、福壽海延滿樂

天筆和合樂の、大福長者に成けつかふな文をねさづけなさる、
 皆、お請なされませ、我等は其内神前を、はらる、清めて參んど、
 何國共なく出て行、家來共、只今おさづけなさる、ど、うぬ
 ちも心をしやうじやうに、有難ふござります、皆の衆上正直
 しやうろに我はめて壽福の文を授べし、龍神詞は分るまじ、日本流
 におしゆべし、皆、信心こらしつ、はやしてくれよほんふたち、
 く、はやしてくれよほんふたち、詞左の腰を延其上に右
 の手を拳にしてたいしを開きしやうしのかうをまけ左の掌の上に
 置事しやほんのとく是を以て則七度しんどうせ貧者、忽福者と成、
 寶の藏をならべ立むりやうのさい福をじうまんする事雨やあられの
 よるが如く金と銀と錢とありとしやことめなふとさんご琥珀とし
 んじゆの七寶しゆつしやうして大福長者と成なむはくじやさやうう

かやしやぎやらべいしんたまにひんてんらんそはか、なふまくさら
はたしまやていひゆびじんはほくけいびやくさらばた、けんうどぎ
やてそはらけいさんさやさやなうけんそはかごこくさいしやううか
やとんどく如意、寶珠わうたい辨才天、うゝゝ、こそくところ「立
歸る

伽羅千代萩

○第六段

いつまでも、かはらぬ御代に、相竹の、代は幾千代、八千代ふる、
千代を壽く爪音は、鎌倉山に美を盡す、冠者太郎義綱公の奥御殿、
情弱の聞へ隠れなく砂川へ隠居有ければ、御長男鶴喜代丸、幼稚な
がらも御家督定り、近き頭より御病氣迎、お傍には男を禁じ、諸士
の對面叶はねば家中を始め典藥迄、何と思案も煎じ様、常より館物
さびし、諸士頭信夫の庄司爲村の後室沖の井お前、渡會銀兵衛が妻
の八汐、襦姿しどやかに、禮義正しく打通り、詞イ申八汐様、大
殿義綱様御隠居を遊ばし、御幼稚ながら御家督の鶴喜代様、此程よ
も御不快迎御食事も召上れず、殊更人に逢給ふ事が御嫌ひ迎、男を

禁して近習小性も遠ざけられ、お傍には政岡殿、婢衆の外叶はず、何卒直に御容体疑ひ申私に心さればいさ、詞手前の夫銀兵衛は御膳奉行と言、今後見の刑部様の御出頭、夫さへ御對面叶はぬとは、政岡の胸中に深い所存が有ての事か、けふは是非共御容体見届ねば、下られずと、奥女中迄申込置たれば、御保養旁々追付是へ御出の筈、何かの様子とつくりと心をお付遊ばせと、二人が噂の程も亦く、奥より婢走出、詞殿様是へ御出と知らせの中に、まだぐわんせあら鶴喜代君、お傍のお伽もおあひとし、政岡が子の千松が、かいて出たる鳥籠の、エイ、愛しき、跡に付添ふお乳の人、はつと二人は頭を下て、恐敬ひ奉る、政岡御前に手をつかへ、信夫の庄司為村の後室沖の井、渡會銀兵衛の内方八汐、御病氣の御様子、親ひの爲參上と、申上ればおとなしく、詞二人共よふ見舞てくれた、

大義くと情有仰にはつと恐入詞我々が存せしよりは艶しき御容体、見奉つて我々が安堵、去ながら御食事進み給はぬ由、一家中の心遣ひ、忍ながら沖の井が、申付し今日の御膳、少し成共召上り下さる様、ソレく早ふと詞の下、はつといらへてお傍の女中、捧る膳の目八分、御前に直せば、嬉しげにそんなら、飯くふても大事ないかと、座に付給ふを政岡が、尻目ににらまれもぢくと、詞イヤくおりや、飯はいやじやく、見よ千松雀が飯をくひたひやら、口を明て泣はいや、よはらやつじやと、乳母が顔、見やる目元に涙ぐむ、御心根のいたはしさ、じつとこたへて政岡が、イヤ申お二人様あの通り御膳をお進め申しても、いやじやくと御意遊ばす、お傍に付添政岡が心遣ひ、御推量下さりませ、カ醫脈を窺ひ申さんにも、男たいせし者はお嫌ひ、夫故に典薬も、此八汐がそこへ心の付し

故、御典藥大場道益が妻の小巻、女ながらも夫に劣らぬ醫術の譽、御容躰窺はせん爲召連て参りし、と召出せと詞の下、はつとお次へ婢がやがて伴ふ年ばいも、四十に近き二つわけ、襦さばきも、しとやかに遙末座に手をつかへ、詞恐れながら、大場道益が妻の小巻、御脈窺ひ奉らんと、すり寄ば政岡が、いざと進めに鶴喜代君、れ手を出させ給ひければ、恐れ慎しみ御脈躰、とつくと窺驚く面色詞「ヤアコリヤ」是只今必死の御脈と、いふに胸り驚く人と暫し、詞もなかりしが、沖の井御前不審顔、詞「ヤアコリヤ」御物とし御顔色常にかはらぬ御様子、夫に必死の御脈とは、成程御不審御尤、仰の通り艶しき御容体、夫に引かへ絶命の御脈とは、何共不思議、恐れながら若君様、是へ御越遊ばされよと、遙かあたへ誘ひて、またも窺ふ御脈に、はたと手を打ち、不思議や、詞あれにて見れば必死の御

脈、今又是にて窺へば、常に替らぬ御脈体、怪しやと眉にしは、政岡始人とも更に心はおささらず、何思ひけん沖の井御前長押に掛たる長刀追取ぐつと突込天井の、板こじ放せば怪しき曲者、落るを透さず取て引伏、用意の捕繩手ばしかく高手小手にくくり上、お脈の不審の其根元、サア真直に白状せよ、陳するに在いては水責火責憂目を見するろサア何と、きめ付られて詞「ア、コ」申ます、ハヤモ斯顯はる、上からは有様に申ます、鶴喜代君を殺してくれど、頼まれたも褒美がはしさ、シテ其頼人の名は何と、何者に頼れた、サアくどふじや、サア何と、俱に詰寄政岡が、顔を詠て「サア」扱も詞「シ」はらしい顔わいの、其頼人は誰で有ふぞ則てな、サア何と「ア」くもふ隠しても隠されぬ、千松とやらを代に立たさ、若君を殺して呉と「サア」頼ましやつたじやあいかいの、サア「コ」下郎めが大それた偽り言、コリヤ「ア」科に取て

落さん爲、己を頼んだ拵事じやな、イヤ政岡殿、いか様にあらがはれ
 ても、こなたの工といふ事は此八汐がにらんで置た、逆も叶はぬ覺悟
 召れ、よ、假初ならぬ一大事、とつくりと正しもせず、わらはが業と
 おつしやるには、何ぞ慥な、證據といふは其曲者、現在こなたを傍
 に置いてあの通りにいふからは、是に上てす證據はあ、い、また其上に、
 此一通、鶴が岡の神木の本に、埋て有た釘付の箱、内に込たる願書
 の文言、若君を調伏し、我子を出世させたい、願主松ヶ枝節之助、
 乳母政岡と、有と書いたが慥な證據、何と違ひは有まいかの、イヤ
 夫も眞赤な似せ筆、更と此身に覺はない、無實と云かけ跡で後悔を
 さるゝな、よ、是程慥な證據が出てもまた潔白あらがひ達、又覺
 ないど云、證據が有かな、夫は、イヤ、何と、詰掛られて政岡が覺
 なき身の云譯も、證據なければ今更に、無念涙の外をなき、詞、云

譯の有まい、云譯なくば遁れぬ科人、節之助諸共に、牢屋へ打
 込急度糺明、今日より若君の御守役は此八汐、侍中、政岡をく、
 り上、牢屋へ引と呼はるにぞ、若君はおろく、涙、詞乳母が牢へ行
 なら、おれも付て行たいわいやい、エ、ろりや何を御意遊ばす、八汐
 が申事よふお聞遊ばせや、あの政岡はな、君に敵たふ大科人、科
 人でも大事ない、乳母はどこへもやる事ならぬ、伯父御様、刑部
 様の仰付、イヤ、其刑部もろち達も、皆おれが家來じやないか、夫程
 牢へ入度ば政岡が替りに、ろち達から牢へ行、乳母と放れて居る事
 はいやじや、くどわんばくも、自然と備はる仁心に、嬉しさ限り
 政岡が、身にしみ渡る有難涙、只手を合す計あり、道の八汐も主命
 に返答なければ沖の井御前、嗣君の仰迄もなく、お乳の人に科はあ
 い、朝夕に傍を片時放れぬ政岡殿、誠若君を害せんと思は、人手

を頼迄もさく、仕様もやうも有べし事、夫に何ぞや此曲者、賊政岡
 に頼まれなば、一旦は隠遁る、筈、自が長刀の光りにもろく飛おり
 しは、頼もしむる頼人、又道益が妻の小巻、必死の脈と言たるも、
 あまり割符が合過て、此沖の井は呑込ぬ、夫計でない此願書、願
 主松が枝節之助、政岡と有るからは、夫迎も同じ事、かゝる大事を
 工む物が有と名を顯し、證據の種を殘し置ふや、若や其名が八汐
 と有ば、れ前は科をかふる氣か、あんまり工が淺はかで、詮議達する
 れ人迄底意の程が心得ぬ、曲者めを拷問して、五十四郡をのまんど
 する工の底を白状させ、悪事に組する方人共、一々首をさらべて見せ
 う、どつくと見物なされよと、此場の善惡明白に見通す如き辯舌は、
 實も信夫の後室と、奥床しくを見へにける、理の當然にひしがれて、
 八汐は猶もへらず口鞠つべこべとよふおつしやるの、所詮分らぬ

水かけ論、いづの迄云ても同じ事、此儘に差置て、追ての詮議
 夫迄は小巻も下つて休足召れど、目くばせし伴ふ二人に一物の、有
 と見抜し後室の眼鏡はつさぬ一捌、曲者引と、嚴重に、心へたつ、
 竹の間の襖一押明入にける、跡見送りて政岡がまさなき事も身に
 くる、科ははれても晴やらぬ、養ひ君の行末を誰に問へき様もな
 く、心一つの憂思ひ、物あんじ成母親の、顔を詠る千松に、鶴喜代
 君も打守り、詞乳母、何云ても大事をいかや、外に誰もを
 りませず、何成共御意遊ばせ、はんにさつさに沖の井殿、若へ御膳
 を上た時兼て乳母が申た事お聞入遊ばして、よふお上り遊ばさあ
 んだ、夫でこそ此乳母が、お育申た若殿様、お出かしなされた
 天晴など、譽ればおどけなき稚氣に、詞乳母もいと云事は、
 強い武士の云ぬ事と、常にうちが云た故、おれば云ねど、さつかに

から空腹に成たはやい、お道理でござります、けふは思はぬ事故に、お飯の拵へも遅ふ成、あなた様にも嘸お待兼、千松もよふしんぼうしやつた、拵へて上ますと立上れば、詞、乳母、爰に有此膳を、たべるのは悪いかや、申其御膳を上る程あれば、乳母も苦勞は致しませぬと、此程から怪しぬ事共、忠義厚き沖の井殿、差上られた其御膳、疑ひはあけれ共、油断のならぬ此時節、上てよければ此政岡が上まする、こよふお聞遊ばせや、今お館には悪人はびこり、御近習小性膳番迄、ちつ共心は赦されず、忠臣の節之助は、不義者逆遠ざけれ、力とする者もあ朝夕のお繕は皆庭へ捨てさせて、私が手づから拵へて差上るも若毒薬の工もど、みじん心は赦されず、空腹なもお道理ながら、御前のねこらへ遊ばす爲、此千松も四五日前から、三度の食事もたつた一度、忠義故じやとこらへておひま

す、詞、千松そなたは云事よふ聞て、何共云すに辛抱する、賢い、強い、強者じやと、譽れば千松、詞、鼻様、侍の子といふ物は、ひもじいめをするが忠義じや、又たべる時には毒でも何共思はず、お主の爲には喰ふ物じやと云しやつた故にわしや何共云ぞに待てる、其替り忠義を仕て仕廻ふたら、早ふまゝをくはしてや、夫迄は翌迄もいつ迄も、こふ急度すはつて、ね膝に手をついて待ておひます、ね腹がすいてもひもじうはない、何共ないぢらう面作り、涙は出れど稚氣に譽られたさが一ばいに、詞、こらや泣はせぬはへど、ひたいを撫て泣顔を隠す心は流石にも、名にれふ武士の、種なりさ、母はけなげさいぢらしさ、目に持、涙心には、御前に聞す譽詞、詞、ろふじや、強者じや、千松はいかう強ふなりやつたわいの、千松おれれが強い、政岡、おれはちつ共空腹にはないをよ、大名とい

ふ者は、飯も何にもたべずにかふすはつて居る物じや、乳母、おれは強者じや、是は又けふとい事じやは、あふ御行儀な所を見ては未だ千松などは叶はぬ、お強い、そふお強ふては、早ふ飯を上ぎ成まい、ぞ拵ふとかい立て、かたへに飾る黒棚より、出取す、錦の袋物、風爐に掛たる茶飯釜の、湯の心見を、千松に、吞す茶碗も樂ならで、お末が業をしがらさや、いつ水さしを炊き桶、流す涙の水こぼし、心は清き洗ひ米、釜に寫して風呂の炭、直してあを扇さへ、骨も碎くる思ひあり、これもふ飯じやとお機嫌の、我子も共に悦び顔、見れば胸迄突かくる、涙呑込くで、詞、上ますぞへ、噴様早ふ上ましてや、上ませいで何とせう、今上まするまちつと煮たつ其間、お氣に入の雀の子、親鳥が来る時分、そこへ直してお慰、と千松が、返事はすれど立ちやみ、歩む姿も

たよくと、置直したる小鳥籠、忠と教る親鳥の、軒端の竹に、飛かはす、子は孝行に面やせて、はごくみ返す鳥羽玉の、涙を隠すうない髪かゝれば直にまゝに成る、ソナもふ飯じやと悦ぶ子、詞、千松何共あいと云下から、せはしない何の事じや、いつも唄ふ雀の歌、唄ふて御前の御機嫌とりや、エ、どんな子では有はいと、しかられておろく、涙、しやくりながらのしめり聲、ウ、こちらの裏のちさの木に、雀が三羽留つて、一羽の雀がいふ事にや、夕べ呼た花嫁御、竹の下葉を飛おりて籠へ、寄くる親鳥の、ゑはみをするれば小雀の、はしさし寄る有様に、詞、アレ、乳母、雀の親が、子に何やら喰しをる、おれもあの様に、早ふ飯がたべたいと、小鳥をうらやむ御心根、サ、御道理じやと云たさをまぎらす聲も、ふるはれて、まわしが息子の千松が、詞、千松、殿様の御機嫌を、何ぞ

泣顔する事が有、ちいとふても侍じや、コレも七つ八つから金山へ
 く、一年待共まだ見へぬく、飼乳母まだ飯は出来ぬかや、チも
 ふ出来まする、二年待共まだ見へぬく、飼乳母飯はまだかいの、
 せはしない、そなた迄が同じ様に行儀の悪い、イエくわしはたべた
 い事はあけれど、御前様がおひもじからふと思ふて、何のお強い
 お殿様が、おせがみなされう、ソイヤそちがせがむのじや、イエくわしは
 せがみはしませぬ、サアせがまずば今の歌、聲張上て唄ふて見やと、
 云れて涙の聲張上、ほろりくとお泣やるがく、力なくく泣聲
 を隠て連る母親が、何が不足で泣やるすく、歌のせうかも身に
 當る、涙はお乳母が子故の闇ぞやるせなき、若殿小影を打詠め、飼
 コレく千松ちんがくる呼べく、ちんよこいくと、呼ばかけくる
 椽の上、飼チ、よい所へよふ來たなほんにわれは仕合せ者、ねすべり

の此御せん殿様の御機嫌を、直した御褒美戴と紙折しいてならぶれ
 ば悦ぶ体を見る若君、飼乳母ありやア、ちんに成たいと、羨み給ふ御
 不情聞悲しさを堪へ兼、飼チ、お道理じやく、日本國の其中に幾億萬
 と限りなき、人の果報を請給ひ、五十四郡の御主と、榮耀榮花は上
 もなき何くらからぬ御身にて、思ひかけあい御辛抱、飼縦賤い下
 く々でも、こふいふ事が有物か、ましてやついに見も聞も、涙ながら
 に政岡が申事迎おとなしう、聞入給ふいたはしや、現在御内の御家
 來が、飼邪非道に組したがひ、殺害せんどの工みとは、知たる故に
 影身に添、おまめな御身を御病氣と世間を偽胸欲に、稚い御身に朝
 夕さへ思ふ様に上ぬ故鳥獸のゑばむをば羨しがるねん心、御尤
 共お道理共云に云れぬ御身の因果、雀や犬におどつたる宮仕へして
 忠義じやと、云れう物かと喰しはり胸も熱立風爐先の屏風にひしど

身を寄て奥を、憚る忍びなき、稚けれ共天然に大守の心備はりて、
 飼乳母何で泣のじややい、そちや千松もたべぬ内、れれ一人せは
 しいと思ふなら、堪忍して泣てくれさ、うち達二人がたべぬ内は
 いつ迄もおれは堪へてゐる、おれがたべても乳母がたべずに、死に
 やつたら悪い千松、そちが死でも悪い、ア、ハイ、よふおつしやつ
 て遣はされます、ア、有難ふ御ざります、乳母が今泣たのはな、ア、飯
 の早ふ出来るまじさい、何の悲しる事はござりませぬ、コレ、涙はあ
 い、御ちうじませ、ホ、ホ、おかしい、今ので、飯が
 出来ました、いつもの様に、握くして上まこよと、いひがひ取て
 手の内に、結ぶを千年と待詫て手を出し給へば、飼、くた待遊ばせ
 や、吟味の上にも吟味せねば、御辛抱のかいがない、先御毒味と千
 松が、顔を眺めて、飼、氣遣ひない、マ、御膳、れ心しづかに召ま

せと、云ふにいそく御悦び、千万石を手の内に握る御身に引替へ
 て、只一握りの握り飯を數の珍味と思召、御心根の勿體やと、君
 を思ひ我子を思ひ、心の奥の忍ぶ山、忍び涙の折からに、飼、梶原様
 の奥方御入ありと、呼はる聲、心得ぬ梶原の奥方とは、何にもせ
 よお通しませ、コレ千松うなは次へ、常々母が云し事必々忘まい、
 早ふくと追やつて、衣紋繕ふ其内に、沖の井八沙も出向ひ敬ふ
 襖押ひらかせ、梶原平三景時の奥方、夫の權威に榮御前、しどく
 と上座に直り、飼、どれ、れ、れ、れ、出向ひ太儀、自今日来りしは右大將
 の御上使、夫景時承はれ共、義綱の二子鶴喜代病氣によつて、男
 たる者を禁じたと聞し故、夫に替る此榮、義綱隱居の其後鶴喜代
 の所勞、殊に食事も進まぬ由、御心を付られし此御菓子、頼朝公よ
 り下され物、有難頂戴有と、持せし菓子箱差出せば、入沙引取、飼、

有難い大將よりの下され物、申若殿様、早ふ頂戴遊ばしませと、蓋押開き、詞「まゝお見事な結構な此か菓子、イヤ召ませと差出す、流石童の嬉しげに、立寄給ふ鶴喜代君、詞「ア、申御前様、又其様なさもしい事、御病氣の御身なれば、お毒に成たら何となさるゝ、こつちへお越と政岡が、詞打けす榮御前、詞「ヤ、頼朝公より下さるゝ、御菓子何疑ふて頂戴させぬ、是非此榮がたべさせる、ア、夫でも、但し頼朝公の仰は背いても苦しうないか、サア、と權柄押、奥より走つて千松が、其菓子ほしむと引摺み、何のくはんせも只一口、八汐が胸り榮御前、毒の工みの顛はれ口、忽のうらん目を見詰蹴ちらかしたる折はさんらん、八汐はすかさず千松が、首筋片手に引寄せて懐劍々つと突込めばわつと一聲七てん八たう、驚く沖の井政岡が仰天ながら一大事と、若君押やる我部屋口、戸口に付添守り居る、詞「ヤ、何

をざはく、さはぐ事はなないわいの、忝も頼朝公より下されし此折、蹴破しは上への不禮、ちいさいがさでも其儘には差置れぬ、夫故に手にかけては、ね家の爲を思ふ八汐が忠節、ふん、可愛そふに、いたいかゐのふ、他人の私さへ涙がこぼれる、コレ政岡殿現在のうなたの子、悲しうもないかいの、何の「アお上へ對して慮外せし千松、御成敗は御家の爲、ス、是でもこなたは何共ないか、是でもか、く、なぶり殺しに千松が、苦しむ聲の肝先へこたゆるのらさ無念さを、じつとこらゆる、辛抱も只若君の大事ぞと、涙一滴目に持ぬ、男まさりの政岡が、忠義は先代末代迄又有まじき烈女の鑑今に其名は、かんばしき、榮は始終政岡がうぶりに氣を付打は、るみ、詞「ア、出かした八汐、右大將より鶴喜代へ下さるゝ、大切の御菓子、小倅のが出しやばつて、すつての事に大事の工み、イヤ、大事の菓子を

荒した科、殺したは八汐が働き、流石渡會銀兵衛が妻程有、政岡には自か、云聞す事も有、沖の井八汐兩人の、暫く次へ間をへたて、遠慮召れと榮の詞、何と違變も沖の井が、深き心は和田津海の、汐の八汐も打連て伴ひ、一間へ入にける、跡先見廻し榮御前、政岡が傍にすり寄て、爾年比仕込しそなたの願望、成就して嘸悦び、エ、何とおつしやる、ア、隠すには及ぬ、東西わかぬ内よりも、取替置しそなたの子の、鶴喜代が身に恙あふ、義綱の誠の倅、千松が此最期、嘸本望で有ふのふ、エ、取替子の様子は先達て知つたれ共、もしやと思ひ最前から、窺ふて見る所、血筋の子の苦しみを、何ほ氣強い親くでも、こたへらるゝ物じやあい、若殿にして置我子が大事、ろなたの顔色替らぬは、取替子に相違はない、ス、皆心は同腹中、刑部殿共内談をし、諸事我夫の差圖有ん、先今日は立歸り、病氣の様子申上

ん、必く何事も、人に悟られまいぞやと、一人吞込ゆらくと館をさして歸らるゝ、跡には一人政岡が、奥口窺ひくゝて、我子の死骸いださ上、こたへくし悲しさを一度にわつと溜涙せき入せさ上歎しが、爾、千松よふ死でくれた出かしたあゝ、そなたが命捨たゆへ邪智深い榮御前、取替子と思ひ違へ、己が工みを打明しは、親子の者が忠心を、神や佛も哀みて、鶴喜代君の御武運を守らせ給ふか、ハ、有難や、是といふのも此母が、常く教て置た事、稚心に聞譯て、手詰に成た毒害を、よふ心見てたもつたのふ、ア、出かしやつた、そなたの命は出羽奥州五十四郡の一家中、所存のはるを堅めさす誠に國の、礎や、とは云物の可愛やあ、君の御爲兼てより覺悟は極めてゐながらも、せめて人らしぬ者の手にかゝつても死ぬ事か、素性賤しぬ銀兵衛が女房連の鉢に掛り、なぶり殺しを現

在に傍に見て居る母が氣はどの様に有ふと有ふ、思ひ廻せば此程から、唄ふた歌に千松が、七ッ八ッから金山へ一年待共まだ見へぬ、二年待共まだ見へぬと、歌の中なる千松へ、待かひ有つて父母に顔をバ見せる事も有ふ、同じ名の附千松の、そなたは百年待た迎千年万年待た迎、何の便りが有ぞいの、三千世界に子を持た親の心は皆一ツ、子の可愛さにとくな物食ふなど言てしかるのに、毒と見へたら心見て、死でくれいと云様な、胸欲非道な母親が又と一人有物か、武士の種に生れたは果報が因果か、いぢらしや、死るを忠義といふ事はいつの世からのならいしぞと、こりかたまりし鐵石心、流石女の愚に返り人目あければ伏まるび死骸にひつしと、抱附前後、不覺に歎きしはことほり、過て道理あり、後にすつくと八沙が大聲、何もかも様子は聞た、こつちの工みの妨女、己も生ては置れぬと、

詞の間押明て、詞不忠不義の銀兵衛夫婦、工みの次第白状せよと、立出る沖の井、詞此八沙に白状とは、其證人は爰に有と、言つゝ出る顔見て悔り、詞そちは小巻、能い證人で有ふがの、夫道益に言附て、無理に毒藥調合せ、此事外へもらそふかと、よふ夫を殺したな、夫の敵と思へ共、女の身の討事叶はず、態と悪事に一味して、まつかう手めを上よふ爲、鶴喜代君と千松を、入替子と言たも小巻、夫故に榮御前、うまゝ此場を歸りしも、裏の裏行ヒ加減、眞直に白状と、忠と不忠の喰合せ、毒藥かへつて藥と成顔に似合ぬはいさいは、たぐひ内義の手柄なり、是迄と八沙が懐劍心得政岡請流す、互に嗜む太刀さばき手をつくしたる、二人の女、我子の恨一心に突込懐劍打落し、直に切込八沙が肩先、ひるむを取て突通され、こくふを搦でもがき死、悪の報ひは忽に心地よくこそ

見へにけり、手柄くど沖の井小巻、共に悦ぶ折からに、物音人聲
 さはがしく、ヤア人音は椽の下、油断ならざる若君の御身の上も氣遣
 ひ也、ヤア婢中燈火く、はつと答へも銘々手燭、手でに一腰長刀も
 さらめさ渡る椽の下、身は鐵石の節之助、寄くる忍びを人礫、はら
 りくど投ちらす、物のあいろもくら紛、たけばつくんの大鼠、口
 にくはいし系圖の一卷飛鳥のごとく駈行を、透さぬ松が枝小柄の手
 裏劔鼠の頭忽ちにはつともへ立火炎と共すつくと立たる、異形の姿
 詞ア、不思議や、密にどのの椽の下、斯取かこみし曲者はら、さは
 ぎに紛れあらはれし、群にすぐれし大鼠、まさしく忍びの幻術成か、
 ハ、怪しやナ、此一巻を奪ん爲、大願成就嬉しやな、聲ははるかに節
 之助、曲者待と聲より早く、はつと打たる以前の小柄、心得松が
 枝忍びを楯、胸先血煙り曲者は跡を、くらまし出て行

伽羅先代萩

○第七段

舞々く休めく、おらが旦那明衡殿は、人道ひが能と聞、跡の季か
 ら住で見たが、此頃の鬧敷さまでは骸がついかあひ、夫々専内が
 云通り、朝から晩迄働さどうし、其上に京都から、上使とやら檢使と
 やら、けふ此所へ來ると云て、あの様に幕打廻し、饗應じやの御馳
 走のと、酒や肴でませかへす、残らずあれを喰ふて有、おいらはす
 ぐらひな腹で、寒晒の此處を、明六つに御戸帳開き、夜九つに閉帳
 して、着の身着の儘轉りどやるは、無便事ではあいかいはい、コレ是
 専内が云通り、中間の身の上程、うち見には美と敷て、無便者の上
 はあし、去ながら悔なく、此身の上にも樂み有、最前幕へ運ふ内、

ちよろりといがめた。此樽、三人寄て呑ふじやないか、是は出かし
 たすべやいやつ、肴さどしは榮耀の沙汰と、芝に、べつたり毛だら
 けな尻かたばみに押直り、さいつさ、れつたべつ押へつ香程に酒も
 よい程廻り口、江戸兵衛茶碗下に置、詞、何ぞ肴がはしむな、ア幕の
 内にころ肴はたんと有らん、ソリヤ知た事、此専内が運ぶ内、一と蓋は
 取て見ねど、大方中は蜆の酢和、鮪のさしみさらぞの煎上、鮪こ
 はだを魚田にし、夫から段々てうじて來たら、湯豆腐など、奢であ
 る、コリヤ江戸兵衛、我は其様を料理をば、喰た事は有まいか、ア切
 もこいつはきつぬげび職、喰物の事計ぬかしおる、忝、も此江戸
 兵衛、すいどの水で育つた男、其様さひれつな事は存存かいわい、
 コイツせんしやうをぬかすがな、江戸は江戸でも、大方裏屋の九尺店
 一つべついに割鍋かけ此ころは米は高し、其目くの小買で有コリヤ

おとがひのうごく儘様と人の店さがしするがな、忝、此男の、
 住し所を云て聞そか、ア聞ふか、云ぞよ、聞ぞよ、抑此男の住た
 る所は、淺草見付の邊りに於て、島屋といへる現金店、先其間口が
 五十間、奥行が五十五間、土藏作りに家を建、ヤア藤井と書しのれん
 を掛番頭手代子供迄、六百人餘の人を遣ひ、ヤア某は其中で、番頭
 殿か、イヤ飯焚殿じや、本に人の行末と白水の流れ程知ぬ物はない、
 江戸の者が奥州三界わいらと附合も他生の縁、イヤ又江戸の繁昌が見
 せたいわい、先現金店と云物はな、手代衆が二百人計、抹香もつた
 様にのらりとあらふと、店に子供が立て居て、お這入をさいやしや
 ふ是へ〜、時に女中杯來ると、お出さされませ、今日は長閑
 にござります、此間の地合を最一度参覽じませ、ア子供や、ハッヤら
 わの八丈替り島、十四五反持ておじや、勘三参覽じたで参座りませ

う、羽左衛門もさつゝの評判でござります、判取など、やらかすは、
 扱夫は賑はしそふな事じやな、したが其勘三羽左衛門とは、どの
 お屋敷の浄家老だ、コイツ、生得田舎の芋堀だ、コイツ、其勘三羽左衛門とい
 ふはあ、日本一の歌舞伎芝居、イヤ又其繁昌が見せたいな、役者と云
 物がたんと有て、義経をする時は義経、金平は金平、傾城は傾城と、夫
 りに分る所が妙だは、夫をわいらに見せたいな、見たいなじやが此
 様を遠國に生れては、夫も一生得見ずに仕舞であらうとさうく、
 打まはるれば道理、廻去あがら江戸中に生れても、屋敷方の奥
 女中、又町方の奉公人、芝居を見るは一年に漸と一度、二度、其様
 な人には彼聲色でたんのふさは、何聲色とは聞かない染色だな、エ、
 かば色の事である、但は萌黄か花色か、イヤ、其様な事じやない、今
 云た役者の聲がらを、とつと其役者がそこへ出た様に似せるのじや、

おれも江戸に居た時は、其聲色を遣ふ事が大名人、聞てが有から聞
 したいと、口から出儘の太平樂、聞て皆々こすり寄、鬨夫は何より
 面白かる、芝居を見る事はあら共、せめて其かば色とやら聲色と
 やらが聞たいあ、とふぞ一口所望じやと、せがみ立られ今更に、知
 らぬとは云れぬ時宜、高で向ふは田舎者、知らぬを當に押つよふ、
 聞そんならわいらは彌々知らぬな、イヤ、知らぬ、ほんに知らぬを、
 知らずばさらば遣つて聞ろう、併聲色遣ふには、歌があくてはあら
 口が、わいらうたつて呉あいか、歌といふても在郷者、白引歌よ
 り何にも知らぬ、聲色の歌は文句がさまつて有、ア、何とやら、ア、
 夫、雨の降夜は一しはゆかし、此文句に何成共、節を付てうた
 つてくれ、そんなら節は何でもよいな、雨の降夜は一しはゆかし、
 東西、只今遣ひますが市川團十郎でござります、金あらたつた

三百兩で可愛ひ男を殺すか、金がほしむな、二八十六で多付られ
 て、二九の十八でつゝ其心じやはいな、とつともふゑらゐもんじや
 はいなアヨ、團十郎様、團十郎は女役じやな、今のは大方十七
 八、娘に成た所と見へて、可愛らしい風俗迄が、思ひやられて面
 白いわい、アま一つ所望じや、今度はかふ金平金時の様な、
 強い事がよかる、と、請のよいに圖に乗て、剛強い事あら、夫
 づ、うんなら瀬川菊之丞、こいつは又可愛らしい名じやが、若菊
 之丞は女役じやないか、江戸一番の敵役、脊の高さが六尺餘りで
 ふとり肉、たとへて見様なら誰で有ふぞ、ア、此國から出られた、
 てうと谷風と云ふ男、顔をまつかにぬりちらし、橋が、りからぐは
 たり、と、聲色計は面白ない、ついでに身振も仕て見せう、お
 れが足を踏度に、そこの石をひらつて來て、今の樽でもた、いた

、おつと合點と、專内是悲内、かけを打役ぐはたり、ぐはた
 く、先此如くとふんばたがる、詞、菊之丞様、椎の木四
 五本こだてに取、赤澤山の山千鳥、ほぞんかけたか掛千鳥、どんび
 はと、うからすはか、ア、替つた、對面じやな、と、何を云やらや
 きたいも、知らぬが佛そ、う、がやつちや、とほめにける、江戸
 兵衛、心付、詞かうしてへら、遊んだら、また頭めが呵るであ
 ろ、尻のこぬ内、と、帯かたげて銘、にとつかは、かしてへ急ぎ
 行、天さがる鄙とはいへ、風俗は、都に耻ぬはげし地の、歩をひら
 ふて象瀉御前、娘文字摺、伴、乗物つらせしづ、と、どある
 木影に立休らひ、詞、なふ文字摺、けふは御先祖秀衡様の御命日に
 相當れば、定倉殿廟參の筈あれど、公用しげき中なれば、夫に替つ
 て自か歩路を行も君への恐れ、うあたを一所に伴ふも都より上使の

御入、御馳走役はうきたの夫、祝言はまたせねと言號の千賀之助殿、餘所ながら顔も見せし、去ながら屋敷からは餘程の道、うなたも定めてしんどかる、私よりは母様の、常かられひろいおされぬ道嚙お勞でござりませふ、お使者儲けの此床机、ちとマアお休遊しませと、親子の中も武家は武家堅い程お可愛らし、詞、家來共、暫く休足する間乗物はそこに置、木影に休んで歸りを待、サア文字摺とめたへ成、床机に休ふ程もなく、京都よりの使者羽根川丹下、伊達千賀之助伴ふてしづくと出来れば、夫と見るより萩原藤治、二人が前に両手を突、詞先以て遠路の御光駕御苦勞千萬、拙者義は定倉が家來萩原藤治、憚あから一つのお願ひ、先祖秀衡の目鏡を以て、主人定倉代々預かる領地の内、今改めて明衡殿の支配地に罷成事、主命もだしがたけれど、何共拙者其意得ず、此義意恨の元とならば、

終には兩家の不和と成て、自と忠義を忘る、道理、今一應了簡有て、御割戻し下されかしと恐れ入てぞ願ひける、ホ、萩原の願ひ尤至極、定倉殿と親明衡、兩人意恨を差袂まは鶴喜代君のお爲もいか、ノ、コリヤ丹下殿御思案有て、御割戻し遣されまいか、成ませぬ、何事も皆此胸に、何にも云すと扣へてござれ、ヤイ若い者、此度の領地の事、主人鶴喜代の指圖計と思ふか、忝くも梶原殿内意を以ての御仰、其方如きの知る事ならず、上使に向つて過言を吐は、主人定倉の言付あらん、後日の祟りをや待ておれど、倍にかゝればおたはむのと、詞鶴喜代君の仰と有ば、了簡の付べき品も有ん、が先祖秀衡武功によつて、鎗先にて取たる此國、他家の差圖を請る様も主人であら、緩急あり其音骨、切提てくれんずと、切及廻せばおなたも身構へ、既に斯よと見へければ、象潟中へ分入て、詞、お待下されませ、自

は定倉が妻象潟と申者、最前よりの家來が不禮、御立腹は御尤、が慮外の段は幾重にも、御了簡下さらば、忝ふ存じます、イヤ、あふ藤治、御主人様より我夫に、數代預かる領分なれど、他家へ上るといふではなし同家中の明衡様、殊に内縁有家へ、お預あさるを其様に、何を争ふ事か有、御覽じませ、田舎武士と申者は、面々が勝手計、必お氣にさへられて下さりますなへ、コリヤ、其方は此様子、定倉殿へ早く申せ、イヤ、何事も此胸に、合點がいたか、ア、早ふに、是非なくも、主命何と詞さへ無念を、堪へ立歸る、跡打見やり、詞、イヤ、何象潟殿とやら、其元は定倉の奥方とな、領分のせばめられ無無念にござらうが、主命なれば是非ない事と、早く歸さつしやるがよい、ヤ、コレ、千賀之助殿、其元親父預り地の外、十分の棒杭打せ、嘸大慶にござらうの、誰しも筒様の目出度事、似る爲に幕の内、お盃を頂戴致さる

よ、ヤ、コレ、兎角のいらへもさつしやれぬは、とふでござる、其元の御利分に成事、刑部殿の差圖成と、モ、一つは拙者が、勤を以て、一個様に事を取計ふも、此國に澤山成、エ、金花咲陸奥の、金花咲御馳走に預らんと參つたに、不興の躰は心得せ、但しは使者をわなせるのかと、吃相替れば象潟は、上使の前に差寄て、詞、お氣ほうしにお茶一つ、召上られて下さりませ、イヤ、其元の馳走は請ぬ、かつふの構ひ召るゝな、ガ、心得ぬは千賀之助、餘人は知らず、某へは、逆様に這つくばい、馳走答拜すべき筈、不快でござります、何とかいやる、ヤ、此四五日はさつら病氣が差發、一向人事も分りませせ、夫故私是一家の事成、けふ御馳走の其役に頼れました事なれば、モ、何事も御遠慮あふ、仰付られ下されよと、此場の時宜を夫ど共云ぬ色成一包、上使の袖へ差入れば、ちやくと袂でしびめて見、俄に作る、はや、笑顔、詞、

扱はうふいふ事ことで有あたか、夫それは近頃御苦勞千萬ちがひ、千賀殿も病氣びやうきと有あば養生やうじやうが大事だいじでござる、早く薬くすりを用もちひさつしやれ、象潟殿きさかたのが取持とりもちなさるれば、其元そのもとは是これにござるにも及およばまいさ、身共みども迎むかへも疳癩かんしか持もちおこりそふ、其時そのときは、彼今かれいまの、萬金丹まんきんたんか、金勝きんしょう丸がん、金の字きんじの付つ妙薬みやくを、給たまはると、忽たちまち直ちかります、是これから幕まくらの内うちへ参まゐり、疳癩かんしかの養生やうじやうなから、御馳走ごちそうに預あづかりませふ、夫それは何なによりお嬉うれしむ、イヤ文字摺もじずり、千賀ちが之助のすけの病氣びやうきも大躰だいたいでは癒なるまい、そなたは近頃大儀ちかごろだいぎながら、跡あとに残のこつて介抱頼かいほうたの、但ただしは母ははが殘のこらふか、アアか、様さまのおつしやる事こと大儀だいぎを勤つとめるが、ちとなどお前まへへ私わたくしが孝行かうかう、夫それ、申まをす使者しや様さま、孝行かうかうを娘むすめではござりませぬかいな、イヤ神妙しんみやくな事ことでござる、あれなら娘御むすめの御馳走ごちそうでも、随分ずいぶんとよかるふが、とふ云いても若いだけ、今のナレ萬金丹まんきんたん、金花咲陸奥きんがはななくちの、心こころが付つぬと我等われらが迷惑めいわく、若者わかしよは若い同士どうし、

象潟殿きさかたのには御案内ごあんない、然しからば左様さやう、かふお入いとぬり廻ましたる追従おしやうも、深ふかき心の奥方おくかたは伴ともひ「幕まくらへ入いにけり、千賀ちが之助のすけは黙然もくねんと、思案しあん取とりく後あとには心こころもたゞ文字摺もじずりが、聞きイヤ申まをす千賀ちが之助のすけ様さま、ね心こころ悪いわるいがじやうならば、お背中せなかでもとすりましやうかへ、ア、縁えんあればこそ深切しんせつに問とて下くださる、忝かたじけない、只心得ただこころぬは父ちちの胸中むねちゆう、此頃このころはそなたの父ちち、定倉殿さだくらどの共中どもなかよからず、さすれば主人しゅじんへ不忠ふちゆうの基もと、但ただしは深ふかい思召おぼしめし、有あての事ことか何なんにもせよ、とふも思案しあんに落付おちつぬ、アまたあんかよそ事ことに、紛まぎす様な事計やうなことけい、云號計いひなげけにていつ呼向よびむかひさる、やうら、ほんに出雲いづもの神かみ様さまへ、かけた願ねがひの驗しるしにて、思おもふ殿どのへ、嫁入よめいりをけふよあすよと待まち月日つきひ、短みぢい冬ふゆの一日いちにちを、千賀ちが之助のすけと思おもふ心根こころねを、ちつとは推量すいりやうしてたべと、娘心むすめこころの一筋すぢに思おもひつもりし、うらみあき、千賀ちが之助のすけも稻船いなぶねの杏あんには非あらず穗ほに出いで、靡なく心こころの向むかへ人音ひとね、ア、あそこへ親仁おやしん様さま、本ほん

に私か心も知らず悪い所へ明衡様、こふいふ猥らお躰見せたら直に
 勘當請る事、コソどふしやう木隠れも七熊ならぬ乗物へちいそふ成て
 屈み居る、伊達の治郎明衡廟参の下向道、幕ぎは近く立止り、飼夫
 成は文字摺ならずや、京都の涉使者は早お入か、倅千賀之助今朝よ
 り此所へ参り居る筈、其方は知らずやと、様子知たか、知らぬのか、
 氣味悪そふに文字摺が、飼千賀様はたつた今迄、私と話しやあど
 するお方じやあ、うふして常からお達者で、乗物は犬嫌ひ、お屋
 敷にはやどごりませう、早お歸り、なされませと何を、云やらし
 ともあさ、幕の内より羽根川丹下象瀉涉前伴ひ出、飼コレへ、明衡殿
 先刻より涉待中、付ては其元領分の儀、拙者内外取計ひ、十分の
 棒杭打漸只今休足の所、嘸涉満悦でござらふの、コレへ、遠路とや、
 涉懇切の涉計ひ身に取て、いか計、某も今朝より早速参る筈の

先君の廟所へ参詣、心外の不沙汰涉宥免に預りたし、ガ則ち倅千賀
 之助、涉使者、儲の其爲に、い、其儀はお構ひ御無用、象瀉殿の御
 取持で、種々御馳走に罷成、い、響應の役人に付置倅、此場にあく、
 頼みもせぬに横合よりの取持達、世には物好きな者も有物、ナ、お使者と
 どこやらに、毒ある詞聞答め、い、申明衡様、其お詞は誰におつや
 る、最前是に千賀之助殿、病氣の躰に見へし故参りか、つた氣の毒
 さ、お世話申も一家の交誼、ヤ、其一家氣にくはぬ心よからぬ定倉が、
 娘の縁を幸に我倅を取込で、改給はる領分を、割返させん其爲に
 お使者への追従輕薄、其方の猿智恵か、但し定倉が云付か、比興至
 極な追従侍、ヤ、聞にくし明衡殿、縁談は内證事、京都のお使者も
 ござる前聞捨には成がたし、定倉が領分は、先祖の鎗先なまらぬ所
 表裏を以て、郡内を貪掠る明衡殿、ひらたう云ば、國賊斯申のが

御無念あらば、お相手に成ませうか、ナ御返答承はらんと懐刀
 抜掛て、詰寄く柳腰、傍にあぶく氣遣ふ娘、明衡は高笑ひ、詞ハ
 、ハつべこべとしやべつたかき、所詮女は相手にせぬ、御自慢さ
 ると御亭主に、泡を吹せてお目に掛ん、是よりは屋敷へ歸り、不所
 存なる倅めを眞三つに打放し、内縁をさつぱりと、切て仕舞はどこ
 からも、手を入られん氣遣ひあし、イヤお使者には、お先へと傍に屹
 度目を付て、屋敷へこそは立歸る、行間遅しと乗物より、飛で出た
 る千賀之助、日頃には似ぬ父の詞、刑部貝田に荷擔してた家を奪ふ
 巧よあ、ヤ何にもせよ御意見をど、駈行屹相、ア待た千賀之助、阿
 今朝明衡の詞と云若輩者の意見立、聞入ぬのみならず、却て刃にかゝ
 りなば、お主へ忠義はどの命で、アせく所ではあいわいのふ、今日
 の爲躰、明衡殿の必に一物、所存有てか敵へ一味か、善悪分る夫迄

は、千賀之助をこつちへ人質、牢興がはりの此乗物、娘の部屋へ押
 込て日の目拜ぬ座敷牢、屏風の内の轉賣、夜もどつくりと寐さしは
 せぬ、ろふ心得て覺悟しや、イヤのふ文字摺、仮初ならぬ大事の人質
 そなたに番を云付る、取逃さぬ様相興にと、恥かしがるを手を取て
 ひりに押込、詞、ア、いつ駈出さふも知ぬ囚人、はだとはたどをし
 め合て、用心堅固に油断せまいぞ、詞、ア、嬉しそふな顔わいの、家
 來共乗物やれと引うふて、歸るは粹の、水上や衣川へと「立歸る

伽羅先代萩

○第八段

萩のうは風うは氣はいやよ、しめて寐る夜は下紐したひもといて、萩の下
 露つゆわしや耻はづかしい、武名ぶなは國くににはころびぬ、衣川きせがはの館やかたには泉いづみの小治こぢ
 郎らう定倉さだくら、花麗くわれいを好このまぬ奥座敷おくざしき、庭にわは代々よよ経るもとあらの木萩きはぎの花の
 歸かへり、咲時さきときを違たがへし人心ひんしん穩やすからぬ冬の空そら、庭にわには主従しゅじゆん三人さんにんが手と
 にさらへ箒はらひめの、落葉おちば枯葉かればを取捨とりすてて打水玉うちみづたまに置露おきつゆもまがへて、虫と
 や見みへぬらん、主定倉しゆさだくら機嫌能けんよく、千賀ちが之助のすけ、今日けふは其方そなたが手傳てんでひて
 思おもの外ほか早い仕舞しまひ、嘸草さざなみ臥ふで有あふ休足きうそく仕しやれ、是これは痛いた入いたるお詞ことば、
 お前様まへさまこそ嘸さぞお勞つかれ、何事なにともか構かまひなく、ひらに御休足ごきうそくなされま
 せど、すゝめに定倉さだくらかたへの床机しやうき、腰打こしうちかけてたばこ盆ぼん、させる取とり

上薫らす。煙にうさを吹はらす。花に餘念はなかりける。飛石傳
 ひ、歩み來る。定倉の奥方象瀉御前、跡に付添ふ文字摺御寮、年も
 二八の振の袖心ばへなら器量から京恥かしき品かたち、婢はしたが
 取くに、小竹筒組重數々を床机の元へ持はこぶ、奥方しとやか
 に、飼御秘藏の花の歸り咲、いつも盛りの時分と違ひ、寒氣はげし
 き冬の空、毎日庭へ下り、御持病でも發つてはと、文字摺に氣
 を付られ九献でも上たいと、此子が手づから切刻、所替れば品どや
 ら、お氣はうとにさ、一つ、お上りあされて下さりませと、笑酌こ
 ぼる、挨拶に、飼、氣が付て心遣過分、花に心を移し居れば
 うつ氣もせず、けつく土なぶりは身の養生、ナニ梅平は次へ立て休足
 せし、いと其儘部屋へ立て行、定倉は打くつるぎ、一献と取上
 る、娘が酌に一つ請、飼此盃は千賀之助、そなたへさそふ、一つ

香みやれ、此頃自身庭の掃除を勤るも、秀衡公寵愛有し此萩、夫故
 庭を清くするも先君に仕る心、時あらぬ歸り咲もお家の吉事を告る
 成ん、此もとわらの木萩に寄讀たる歌は、何とやら、娘そちや覺
 へずや、ア、成程其歌は、秋萩の古枝に咲る花見れば、元の心は忘れ
 ざりけり、ア、いかにもく、ある人萩は一年づ、にして枯、若葉よ
 り花咲を古枝に咲ると讀しはとなんす、此萩草花にあらす木也、一
 名をから萩といふ、よつて弓あどに是を作る、飼武勇に長せし秀衡
 公、寵愛有しも尤、花の色も異木にまさり餘國に双ぶ方なき名
 木、先君御秘藏の此木萩、飼一年に二度の樂しみ、去年と今年を秋
 と冬、ハ、面白の詠やと汲かはしたる盃の數廻る年毎に、斯ぞ有
 たき風情なり、父の機嫌に文字摺が、何角願ひの有顔を、見て取母
 が、文字摺、飼父上へ今の事ちやつとくと教へられ、おもはゆげ

に手をつかへ、徒者と思召も恥しけれども、云號の千賀之助様、一
つ屋敷に居ながらもまた祝言もせぬ殿御、父上のお情で、どふぞ今
宵夫婦の盃、お赦しおされて下さりませと、父には願ひ夫には聞
きけがしも戀のかせ、胸の結ばれもつれ糸只一筋の願ひあり、詞ホ、
尤成願ひされ共其盃は追ての事と、云其子細は、明衡が此頃の
行跡、刑部貝田に合躰せしか、去頃より不和の中、彼が心底さぐり
見て、悪説に極まらば其時こそ改めて明衡方へそちが興入若又悪事
に組せしなば、いふ迄もあく叶はぬ縁と諦めよと、聞てがつくり文
字摺が、いづ果しなき盃の、延る思ひのやるせなさ涙隙なき、有
様に、母象潟が引取て、詞此頃上使備の時、明衡様の御機嫌損じ、
夫故に自が伴ふて此館に置千賀之助殿、折を見合せ詫言は自が
心に有、其上父御が明衡様にお逢ひなされたら、祝言もつる出来る、

必さきさき思やんか、此國にて明衡定倉といへば羽翼の臣、代々
忠義を忘れぬ家、明衡様に限りよもやをういふた心の、奥そふ
でない、水は方圓の器に随ふ、油断成ざる此時節、移り安きは人心
と、詞の中に千賀之助定倉が傍に差寄て、詞父明衡が胸中は定倉様
こそ能く御存じ、主君を忘れ非道に組し、同天の戴かず、去ながら、
いか成天魔が見入にて、逆徒の氣さしも候は、一家同友の御よし
み御諫言なし下さらば生々世々の御厚恩と涙と共に、願ひける、詞
ホ、せつある願ひ尤々、併義によつて一命は塵芥よりも猶輕し、君父
につかへる千賀之助、若又明衡君に弓引心有、ハ、仰迄も候はず、
君の爲國の爲、父明衡を打て捨、腹かつさば父諸共冥途の先掛、
ナ、其詞が武士の誓言、ハ、たくましや健氣やと、流石血筋の縁に連、
千賀之助が心の中、思やつたる目に涙見合す顔の一重花もしほる、

計なり、折柄下部が手をつかへ、胸錦戸鷲五郎様御入成と知らすれ
 ば、心得ぬ、刑部が倅當國へ來りしとは、何にもせよ是へ通せ、象
 瀧娘も次へ立ちやれと追立やり、衣紋繕ひ、待間程なく、入來る錦
 戸鷲五郎、都育と名にも似ぬ節くれ立し角前髪、疊さばりも荒け
 赤さも大へい成る頬がまへ、上座にとつかと押直れば、定倉は威儀
 繕ひ、詞、珍らしや五郎殿、先以て遠路の所御苦勞千万、御用の趣
 承はらんと手を突ば、拙者遙くと參る事餘の義にあらす、當
 時都には奸佞の者多く、や、共すれば主君を害し、家國を押領せん
 との企、愚父を始貝田某、日夜をわかたず寢食を忘れ、去によつて
 間者を入聞たる所、其逆徒の張本といふは、當國にありと事明白た
 るによつて、貴殿と某申合せ、國賊共を搦捕一とに首をならべ國
 家の歎きをしづめん爲夜を日につめて參つたり、こゝ存じも寄ぬ大

變、承つて驚き入、其反逆人とは何者でござるな、サレバ其逆徒と
 いふは、貴殿と縁有伊達の治郎明衡さ、承はれば梶原殿の御意と偽
 り、貴殿の領地へ棒杭打す是杯が彼佞人原と馴合て、定倉殿、貴殿
 に一揆起させ儕等が館へ引寄、手を出さずして討取術、御合點が
 參つたかと同士討さする底巧み、千賀之助つと出、胸ヤア聞にくし
 鷲五郎、棒杭は君よりの御差圖、父明衡が反逆とは、慥に證據有て
 の事か、へ、同じ穴の子狐め、化の皮が顯はれかゝるて、もがく
 は、此鷲五郎を誰とか思ふ、當時肩をならぶる者もなき、錦戸
 刑部が二番ばへ、女童か使の様に、其證據は杯と口を閉て歸
 らふか、愛さ大馬鹿者めが、汝とこのなまじらけたしやつ頬で知
 る事でない、おとがひをたゝかすどろちらの方へかた寄て、ちよ
 くこまつてござい、定倉殿貴公へ見する物有と、懷中より

一通を取出し、此一書披見召れ、松ヶ枝節之助殿伊達明衡、いぶかしと眉に皺、開き見るより悔りし、明衡妹政岡と心を合せ、鶴喜代君を毒殺に及べし、定倉事は、某存る旨有は宜敷事を計はん、是明衡自筆の状、何と御らうじたか、身動きあらぬ此一通、ちよつと小口がこんち物さ、逆も遁れぬ明衡親子可愛や、命が宿腐たか、イ頬を見るも穢らはしいと、あく迄悪言嘲哂に、たまり兼ねて千賀之助、腹にすへかね、詞が過る、察する所汝等親子、貝田勘解由が巧にて、父を科に落さん爲な、我推量に違ひはせじ、逆徒原一々に明白とせんと立上れば、さぞこへく、明あんぐわい成素野良め、某親子を反逆とは、圖あし事をまき出したな、其はしやいた音骨を、切さげてくれんすと鏝打あらしつゝ立ば、さうふいふうぬをと、鯉口くつるげ、詰寄く血氣と勇氣既に斯よと見へ

たりける、定倉押とめ、五郎殿お扣へおされ千賀之助も扣へてたれ、明衡が科明白の上は君の上意を頭に戴き、討取に何の手間隙、今兩人及傷に及び此事世上に流布有は、國の騒ぎ大方なとす、事落去する迄は千賀之助は此方へ人質、最早籠中の鳥同然、五郎殿に大切成討手の役目、何事もお構ひなく奥の一間で御休足、御酒一献召上られよ、某も長途の勞れ、然らば奥にて御馳走に預らん、千賀之助、此世に居るも暫しが中、頼み寺へ人でもやり、似合た様に念佛でもとなへて待ておれ、定倉殿御案内と、欲悪不道の犬侍、力み詰寄千賀之助、押へる定倉驚五郎打連一間へ入にけり、風かあらぬか、萩の本そよと物音忍びの姿、傍りを窺ひく足、出合頭に梅平が見る共しらす曲者は、奥をさして欠入を、明忍び入は何者じやと聲掛られ、振返りて物をも言ず、切てかゝるを

かいくいり、刀たぐつてかつぎ投、拍子に落る一通を疾より後に定倉が、拾ひ取間に梅平が、何の苦もなく曲者をくし上てぞ引すへたり、定倉封じ押開き、何々其方今日屋敷へ忍び入、小治郎定倉討取あば、當座の褒美として、金子三百両、遣す者也、猶恩賞は功に寄べし、伊達の次郎明衡、判左すれば彌々彼が悪心、根深くも巧だりな、出かした梅平、下郎に似合ぬうい奴、今日より後日未長く、武士に取立遣つてくれん、有難存奉る、此上ながらいつく迄も、お目掛られて下されふなら、忝ふ存ますではりますると悦び勇む折こそ有、明衡様御出、合點の行ぬ、斯も仕込し今日の時宜、此頃不和成我屋敷へ、明衡來るは子細ぞ有ん、梅平曲者取遁すあと引立させ座席を改待居たる、早程もあく、伊達の次郎明衡、家に杖突年ばいや腰にあづさの弓取のはりと意路どの

岩盤作、袴のひだも角ひし有不和成中の中敷居目禮計つと通る、定倉も一揖し、詞珍らし、明衡殿、いつぞやより何となく、中絶致せし某が屋敷、思ひ寄ぬ只今の入來、子細ぞあらん、成程、伊達泉の兩家は、誠に車の兩輪のごとく、何れを何れと甲乙なく、國の政事を預る兩人、水魚のごとく有べきを、何故に忍びを入、某を討んどは計りしぞや、證據は忍びが所持の一通、貴殿よりの頼みの状、コレ見られよと投出す、定倉取上打守、年老ねれば麒麟も土馬、流石に名を得し明衡も、刃金がむねへ迫りしな、其方の巧を仕損、詮方あさの破れ口、先うつちから白狀召れ、舌長し小次郎定倉、某に白狀とは、何を以て、アイヤ、鶴喜代君をささ者にせんと、種々の巧みを我能知る、最前召捕曲者が、懷中の狀の文体、人知れず定倉を、害せん巧みの證據の一通、披見せよと以前の狀、差出せ

ばとつくと見、詞、巧んだり拵へたり、似筆を以て某を、たばか
 らんとは愚か、意根有ば武士らしう名乗掛てあせ勝負はせぬ、
 腰拔侍を相手とするは、刀の穢れと思へ共、イサ立上つて勝負、
 何事も露顯すれば、所詮叶ぬ死物狂ひ、狂人同然の明衡なれ共望
 に任せ、勝負、イサと互に鯉口ちつ共赦さぬ、氣配り目配り、
 とくよりこあたに立聞象瀉、心をひやす氷の刃、一度にさらめく電
 光石火、かつしと合たる刃先と刃先、胸のしのぎはこぼるゝ如く、
 勇士と勇士の二世の晴業、襦ひらりと白刃の刃、詞、待た定倉
 殿、明衡様も待てど、我身をじづにぞつさりと、二人も尻居にと
 つかと座し、詞、武士と武士との争ひを、女童の知る事ならず、
 奥方留達して怪我召るゝ、ちと引取刀、イサまわ云事を聞てたべ、
 女童とおのしやれ共、先程からの御二人の争ひ、互に證據は有な

から、夫と分らぬ其内に、打果しなされては、両家共に滅亡し、先
 祖へ對して御不孝と云、主君へは不忠不義、いづとつくりと御思案
 と、詞立派に武家育、合す刃に打非太刀、流石泉が、妻なりし、二
 人も顔を見合して、詞、實も、負た子に教られ淺瀬を渡ると譬
 のごとく、今兩人が打果せば、家の斷絶先祖へ不孝、併汝が巧の
 次第、急度詮議する迄は、傍を放れぬ定倉と、納る刀明衡が、膝元
 へ投出せば、こなたも同く刀をさや、詞、明衡が魂も定倉に付添
 て、汝が底意白状迄、互に放れぬ詮議役、チ、明衡が魂は定倉が急
 度張番、定倉が魂は明衡が急度糺明、後程迄に、仕上を見よと、
 詞のせつば詮議の鏝際國に目貫の両家老別るゝ一間象瀉も、暫し
 休る胸の中連て奥へと入にける、様子伺ひ鷺五郎、出る庭先差足振
 足、傍を見廻し以前の忍び、共に木影を奴の梅平、詞、鷺五郎様、

聲が高い、親刑部殿の計ひにて、伊達泉兩人を、同士討させんと忍びの計畧、圖をはづさず爰迄は仕負せたり、成程く、疾より入込此梅平、又國に残る一味の面々、彌々二心なき血判、コレ一卷にと差出せば、ホ、出かしたく併、此連判を明衡定倉に見付られては事六づかし、コト、汝は是を親人へ、右の様子物語れ、必人に見咎められぬ早くく、曲者は、肌にしつかと納る一卷、爾然らば拙者は是より直、チ、サ、早急げ、ナ、梅平は跡に残り、某諸共何角の手つがひ、早行と奥と、表へ別れ行、隔つ親子の、仕切の襖、明ても明ぬ明衡が、跡に付添ふ千賀之助、父が前に差寄て、爾先程より申ことく、貝田と縁有、親人故、主君に背く氣ざし有と、證據を以て驚五郎が、定倉殿へ讒言は、却て彼等親子が巧み、親人と定倉殿、互に疑念を生せさせ、一虎つゝるに乘ん爲とは思へ共、日比に替り利欲

に迷ひし境論、何角の様子思ひ合せば、若や誠の不忠にやと、現在血筋の某さへ、疑ふ心の出る物、爾今まらくの人心、他人の疑ひ尤至極お心を打明て定倉殿と心を合せ、お家に逆ふ悪人原一に糺明し、忠臣の名を上てたべと詞を盡し理を盡し孝と忠との一筋に涙は、血筋の誠なる、明衡は返答なく、諸手を組たる、こなたの一間障子開て小治郎定倉、爾文字摺、最前よりそちが願ひは、勘當をしてくれいと、女の身に似合ぬ望、様子は何と尋られ、涙ながらに顔を上、姫ごせの身のあられぬお願ひ嘘や憎しと思召、不孝の罪も辨まへぬは、親と親との云約束、祝言せねと殿御じやと、樂しんで居る物を思はぬけふの争ひ故、夫婦の縁も是切に、成たら私しや何とせふ、どふしやふぞいなく、思ひ切れぬ胸の内、いつう勘當請たあら、不和者中でも武士の、義理もいさじも有まいと無

理な思案も千賀様に、添たい計の私が願ひ、人と思召れずと犬畜生
 と思し切、願ひを叶へて給はれとおぼこそたちのあやもなく譯も涙
 にくれ居たる、千賀之助は父の顔、や、打守り恨めしげに、詞いか
 程に申ても、御返答もなされぬは、お心に一物有か、忠義には親を
 も討つ、誠お家に仇ならば、親子の縁をさつばりと、お切なされて
 下されい、不孝には似たれ共、不所存成父上と、一つであい主君へ
 云譯、先祖への我忠義、さつばりと勘當との、ね詞願ひ奉る
 と、口には云へど心には、子として親へ不孝の悪口、勿躰なや恐ろ
 しやと胸へせさぐる血の涙押へ、兼たる、風情也、治郎明衡聲あら、
 げ、詞、若輩者の云れぬ諫言、親に勘當してくれとは、他人と成て
 某に、またも諫めを入れん爲か、但し云號の文字摺に心迷ふて其
 願ひか、何にもせよ親に向ひ、慮外は我に弓引同然、幸飭る此弓

矢目當の的は襖の繪、雪持松の下り枝、一矢に射當ば望の通り、勘
 當をしてくれんと、投出す弓矢定倉も、詞、文字摺、一旦組たる夫
 婦の縁親にかゆるは女の操、とは云ながら只一人の我血筋、捨るか
 捨ぬは正八幡の教へに任す此弓矢、的は襖の松の枝、射當ばそちが
 望みの勘當、早くくと親々が互に詞替らぬ願ひ、はつと一度に取
 上る、親子別れを争ふ一矢、弓矢神の冥慮にも、盡果たるか悲しや
 ど、思へば共に手もふるひ、目當もくるひ弓しぼる、弓弦を傳ふ露
 涙、ねらるかためて文字摺が放す手の内はづるし矢先、するどき羽
 ひいき千賀之助、目當違ぬ松の枝、射當る矢先我胸も、碎くる計親
 と子の縁の切目と思ふにぞ弓、投捨て、どふと坐し暫詞もなかり
 ける、明衡は勇の顔色、詞勝負の一矢に射勝し上は、京都へ赴く伊
 達明衡勘當せし千賀之助、行末頼む小治郎殿と詞に文字摺千賀之助

思ひかけなく驚く二人、爾、年月の本望達し嘸御満足察入、改云には及ばぬ共、刑部を始貝田直勝、徒黨を拵へ鶴喜代君を害せんとする此時節、貴殿某、兩人の内京都へ立越台朝に達し事を糺さんと思へ共、今諸士の別當たる梶原平三景時は、錦戸刑部に内縁あれば、此度の決談は地獄の上の一足飛生ては歸らぬ此役義、勤むべき貴殿と某互に忠義を争ひしが、死るも跡にとどまるも忠義のけつ着せん爲に、俸共が弓矢の勝負射勝し方が都へ出立、命を的の對決も星をばづさぬ忠臣は、武運に叶ひし明衡殿、お羨しふ存ると詞に明衡莞爾と打ち笑み、爾貴殿と某兩人が、心を堅むる事を知らば敵心を赦させして、たんぺいさうに若君を、殺害せんも計られず、敵よりの術に乗、不和成体に成したるも事を延する、互の計略、最前取がはしたる一腰は、死るも生るも兩人が忠義を一ツにせん計

略、又邪智深き鷲五郎、彌々不和に見せかけて、事の様子を刑部具田へ告知らさせんと我計ひ、武士の身の上は人界へ生るより、君に捧る身体八腑、時日に移さず都に登り、佞人原をことごとく罪を糺して立歸らん去ながら、爾老生不定の世の習ひ、父が顔をも能見置、都へ登りし其跡は、定倉殿を親と頼み万事の差圖に隨ひて、文字摺と中能添、子孫の榮を忘るゝ、又母逆も無き千賀之助、御不便頼む小治郎殿と、忠義に撓ぬ武士も、流石恩愛捨がたき、身ふしに答へ千賀之助、文字摺も正体なく歎けば俱に定倉も、親子の心思ひやり、忍び涙にくれ居たる、襖ぐわらりと錦戸五郎、爾、始終の様子どつくと聞、此上は汝等が息の根留んと懷中より、取出す鐵丸庭の面、投ると其儘もへ立つ狼煙、俱に盛の萩の花、一度に散て散亂せり、相圖に駈來る以前の曲者、庭先につゝ立たり、五郎聲かけ、

鷹、狼煙を相圖に味方の軍兵、取かけたるか何とくされば候術の
 如く、狼煙を相圖に寄掛んと、待に待たる刑部が軍兵、定倉殿の下
 知によつて、こなたに仕かけしはうるく火矢、切て放せば一騎も殘
 らず、微塵に碎て皆殺し、此上は其方一人、最早最期に間はなし、
 尋常に觀念せよ、汝が忍びと頼し我は、熊川源五兵衛秀景逆意一
 味の連判狀、最前我手に入し上は親子諸共逆磔、覺悟くと呼ば
 つたり、鬮、扱は儕は熊川よな、斯迄仕込し我大望、汝等如きが術
 に乗、うらか、れしか殘念や、責てもの腹いせに、某が豫て仕掛
 し地雷火にて、俱に冥途の供させん、覺悟ひろげと云せも立す、ヤ
 愚く、地中に陽氣有故に、時ならぬ萩の歸り咲、正しく敵の巧に
 て、地雷の仕掛と計知り、熊川に云合、衣川の水上をせき入たる故
 にこそ、地中に籠りし陽氣を失ひ、見え花は枯しぼむ、草木心な

しと申せ共、お家の凶事を告知らしむ、凡人あらぬ秀衡公の惠の程
 の有難さ、先君御寵愛の此名木、今より後は此花を、先代萩と名付
 べしと、詞は實にも大國の、花も實も有宮城野に、今も其名は世に
 高し、驚五郎は死物狂ひ、定倉目掛切付るを、かいくいつてもぎ取
 刀、其儘はつしと、首打落し、鬮驚五郎を討取上は兩家の疑念も晴
 渡る、此上は二人の子供、婚禮を取結ん、象瀉取あへず銚子く、
 アイとらへて象瀉御前、心計の祝儀のまあび、三方土器取持て、
 二人が前にならぶれば、明衡頭打ふつて、鬮源五兵衛の忠節にて、
 健の證跡出る上は、晝夜をわかず都へ登り、悪人原を取ひしがは、
 躬ごどきの小事にかゝはり、暫時の延引暫時の不忠、早お暇と立出
 る、定倉暫しと押止め、鬮忠臣一圖の御老人、はやり給ふは理りな
 から、過半刑部に一味の中御身一人參會有事、氣遣ふ義には有ね共、

恐るゝに徳有とかや必々油断なく、飼子、尤成御示、錦戸刑部は取
 に足す、貝田直勝梶原が、威勢をかりて忠節を、おほひ隠す術有共
 我又、義心を表に立、誠を以て押時は神國の奇特なとやなからん、
 爾若や彼地に變有ば、若君を竊に守護し間道より馳歸らん事、十日
 の外は出まじきぞ、其間の籠城を堅固に頼む、定倉殿、其義
 はちつ共氣遣ひ有な、本城に楯籠種々の計略諸卒をばげまし、寄來
 る敵を追立く、暫時も足はどめさせじ、其いさぎよき御詞、飼千賀
 之助も其時は一方を給はつて、破竹のごとき堅陣あり共、義を金鐵
 に切て入、井の字巴の字にさき立く、野白にあつたる敵兵共追詰
 く、追散し、武術の程を試みん、飼、いさまししく、此熊川も
 楯籠らば、敵の首をば二三百、珠數つさぎにしてくれん物、近頃殘
 念去りながら、寄手に武功の者有て、思ひかけなく城外に勢を伏

置不意を討ば、夫ころは傳へ聞、野に伏勢有時は、歸雁連を亂す
 とかや、まづ此通りと松が枝に、打込手裏劍梅平が、真逆様にむざ
 んの最期、飼、天晴く、手の内と云智謀の程、末頼母數千賀之助、
 心置あく早出立、然はお暇、再會は、頼がたさ夢の世や思ひ
 數ふは文字摺が、責て一日宮仕へ、泣て見送る象潟が、互の心思ひ
 やりこぼるゝ涙、押包む、忠義の誠を顯す時節、かゝる目出度出立
 に涙は不吉と聲はり上、兵者の交り頼有中の酒宴かな、飼、ハハハ、
 笑は武士の別の涙忠臣、ありける

伽羅先代萩

○第九段

何とく、主人鶴喜代幼少にて家督相續仕に付、信夫の庄司、錦
 戸刑部、兩人後見仰付られしを國本の老臣共、不快に存罷在上
 某義、京都在府に極られ、家中の仕置仕、故高木風に憎るゝの譬、
 信夫の庄司病死以後、錦戸刑部と私一人、政事専らに取計ひ罷在故
 自餘の輩、其誤有ん事を心掛、越度有んにのみ目を付、耳をかた
 ひけ伺は、數年の間何ぞ一兩度の誤無事や有ん、勿論毒殺に及、
 家を奪はんと一味徒黨を催せしんど、努力覺悟仕らぬ義、然所鹿
 忽の訴、コリヤ明衡が偏執邪推、憚ながら此義御賢察下さるべし、聊左
 様の企せん事、天の冥罰恐るしと、辨舌巧に述べければ、梶原顔色

罪に有ざるや、御意恐れ入奉る、まかし、過分の役儀に付用事繁多に相勤罷有ば、義綱の放埒憎弱晝夜傍に是なき故存せぬ事は力及ばず、詞多し貝田直勝、汝富貴那の辯をふるひ、役人共を云掠めんと思ふや、譬は其方、主人の家に大切成重寶有て、汝が方へ預る時、盜賊の爲に奪ひ取れ、某は存申さず盜賊の業成と、油斷の言譯立べきか、其方何と心得居る、若き主人を預かる事器財の類の輕きにあらす、往古周公旦成王を補佐し給ひ、清和の朝に良房の趣人臣たる者の鏡たり、義綱の心亂れ、行跡正しからざるは預人の罪誰にか譲らん、返答いかに直勝と、水を流せる詞の楯板、くらさをてらす明察は實日本のかためなり、貝田は猶もすゝみ出、詞、御意恐多く候得共暫くお扣へ下さるべし、明衡に問べき義有、家の大事を訴へるに御身一人引請、自餘の面々は一向知ざる跡、是不審の第

一也、謀書を作り佞人を集、某を無實の罪に沈めんと計るは、いか成遺恨有ての義成や、是不審の二つ也、又諸士の面々何心も無に、汝一人詞を企、右聽に達奉る事、是不審の第三つ也、言譯有や明衡と、居長高に詰かくれば、こなたも膝を立直し、前汝辨を巧にして専らに非をかされど、何ぞ明衡を云掠んや、某一人事を預るは深き意味有所にて、其方如か知事ならずと、云も果ぬ梶原聲かけ、前、明衡そりやくらい、只今貝田が尋る所一として返答に及ず、意味有事と後日に延、我方に理有事を只今急に云立は、是汝身勝手過る、貝田一人に申と心得しか、忝も決斷所に於て、諸役人をあいがしるにしたりる申分、甚以て奇怪也と氣色損て見へければ、ハ、御意恐入奉る、併ながら、國本の面々一列に申上べき事成共、一味徒黨の後難を恐れ、私一人事を預申上奉る、近年國元へ申遣す仕置等、

道ならぬ事共少ならず、心得がたく存れ共いつの下知何れの指圖にも梶原様の仰、景時様の御内意と申越さるは是なく、當時一天下の間に置いて、梶原様の御意と有は、風雷の如く恐入奉る儀、刑部貝田が非道を訴へ申時は、憚ながら梶原様の貴命をそむくに相似たり、去に依て、コリヤ明衡、委細の様子詳也、去ながら、梶原殿に限り左様の非道有ん様おし、殊も景時殿もつばら歌人の聞へ有、正直の心を種とする歌讀、其歌讀の梶原殿、よも邪に組し給はん但し覺はし御座有や、何のく、左様の事子が知る所に有んや、定て夫は佞人共が、此梶原が威勢を借、諸人を靡す謀事某は存せぬ事、左様なくては叶はぬ所、コリヤ刑部貝田が巧成ん、明白に白状せよ、御意恐入奉る、併ながら我々が謀計とは、何を以ての御仰、其證人は是に有と、貴人高位の恐もなく、明衡が前にむづと

座す、爾、珍らし、浮世渡平、コリヤ其方が證人とは、こりや明衡と言合せ、某を罪に落さん巧ならん忝も御大名の旁、歴々御座の其中へ其方ことさの出席は上へ對して恐れ有、且鶴喜代が後難共ならん、ろる立去と白眼付る、ちの共憶せずくつくと吹出し、爾今に替らぬ派立の口上併某出るからは大言の吐其音骨追付踏さいてくれんすと事も、なげ成一言に、緩意也浮世渡平、爾某が巧みとは何不慥な證跡有や、盗入たけくしいと、俗語のことく其争ひも今の内、某疾より入込しと、熊川共源五共得知らぬ空氣共、透を窺ひ奪取し此一卷に汝を始め、一家中も大半は刑部に一味の連判状、最早通る、方はおし、夫へ參つて繩かけよふか、但云譯の筋有か、夫はコリヤ何とよむやとのつびさならぬ證跡に、さしもの貝田も口唇返答しとるに扣へ居る、庄司重忠威儀繕ひ、爾、梶原殿

是にて事は落着せり、去きから、證據と成べき其一卷改すんば叶ふまじ、赦す是へ持參せよ、明衡頓首して、御前に差出せば、御景時殿、御披見、何の是式見るに及ず、其儘に捨置れよ、伊左にあらす、鶴喜代一家の納りは此一卷の中に有、佞人共に侈し欺され、梶原殿も一味なされ、其元の御姓名此中に有ん事を、恐れて披見なされぬか、夫はよもや左様の事有まじ、然らば二所に見ませうと、兩人立合緒とくく、貝田は一生懸命と面色は良士の如く、明衡熊川兩人の胸の曇りを吹拂ふ、淀風さつと押開く、中には一字一點なく重忠は唯不審顔、景時怒りの聲あらう、鶴喜代等兩人、此所を遊女遊山の座席と思ふや、忝も京都の決断事を猥りに取計、白紙を以て證據とば上を恐れぬ大罪人、謀書を拵へ詞を巧に貝田を科に落さん爲明衡一人の所存にあらす、皆鶴喜代の差圖からん覺悟せよ汝

等と一卷取て投付れば、兩人驚立寄て披見れば、詞ニヤ、白紙、明衡殿、源五兵衛、○間事、の結構は實も執事の奥座敷、上段の間に座をしめて、コレイキヤンインコレイ、と唱ふる仙家の秘密文、鼎に洒々潔淨水、棘の黒髪振亂し天に向つて渴仰し、明衡貝田が對決に、落着すべし彼一卷、唐土盧江の水を取て、是成鼎の中に湛へ、洗落して白紙となせしも、奥羽二國を覆し先祖國香の修羅の忌執、散せん事は今此時、心地よや嬉しやと襖に響らるる聲、疾より窺ふ外記左衛門ねらぬ寄て眞二つと、打込刃曲者は又も囁ふる秘文につれ、次第に手もすくみ思はず知らぬ取直し、我ど我手に數箇所の疵、夢のこゝちのごとくにて、よろぼふ足を踏しめく、爰ぞと切込刀はかへり、眞向二つに血はしたたり、鼎の中へ入る早く陰陽激して忽に逆巻水氣燃立炎、折よく松々枝節之助、さしもに重き大鼎片手

に差上指付ければ、血汐の穢嫌ふと見ろひける曲者早足の松ヶ枝姿に影の添ふ如じり、と付廻せばうんどのつけにたはれ伏、颯々不思議や近會下屋よ忍び君を守護する其折から鼠と化して系圖の一卷、奪取て立退曲者、何にもせよ家系圖此方へ奪返さんと、立寄松ヶ枝曲者は、むづぐとおきて、颯々、豎子、汝いか成強盛成共、我、大室九丹金液經の法を行ひ、雲をおこし、雨を呼、須彌山を扱介子に隠れ、自在を得たる我幻術、汝も下界の鬼となさん、イヒカウキヤン、インシレヒとせめかけ、唱ふれ共更に奇瑞の見へざれば、節之助さたいの思ひ、颯々は外記左衛門が無念の精血、血汐の穢れに汝が仙術、忽失じは天の責、我君を守らせ給ふ氏神の御加護成ん、有難や悦ばしや、此上は系圖の一卷、早く渡せ、壁仙術失たり共、汝等如きた渡さんや、速にここ立去、こまごま云を早く渡せ〇〇〇〇〇

衡、其方筋無事を申、某を科に落さんと謀書を拵へ、剩證據なんど、指上し其一卷、白紙を以て上をわざとひく、汝計の科に非ぞ、主人鶴喜代落度と成て家の斷絶今此時、覺悟せよ明衡と鏝打た、いて詰かくれば、源五兵衛むくりをにやし、颯正しく館を出る迄紛ふ方あき連判状、今白紙と成たるも汝が胸に深き巧、糺さんと立か、る、明衡暫しと押といゆ、詞事ははやるは尤成共、今荒氣を出しては鶴喜代君のた爲にならぬ、じやと申て、先待れよ何事も此胸に先く、次へ立れよと、老臣の詞是非あくもしほく、次へ立て行、梶原聲かけ、者共、鶴喜代始一家の奴原と、く繩をかけ、獄屋へ引、先待れよ梶原殿、貝田勘解由も、暫く扣へよ、明衡證據と成べき一卷の白紙と成しと云も偽り、貝田を科に落さん爲汝一人が巧で有ふ、左様なければ鶴喜代も筋なき事を台聽に達し、上を恐れ

ぬ科遁れど、其方一人落命せば、主人の身の上別條なし、天誠を照し給へば死後に汚名は自然と雲がんに、篇と思案を廻らし召れ、今に始ぬ重忠様の御厚情粉骨碎身仕る共報じ難き御示斯成上は何をか包ん、貝田勘解由に職をこへられ、我威勢を奪はれし其無念や、時なく、斯迄仕込し大望も、時至らねば悔て歸らず、此上の御願ひ、切腹御赦免下さらば、神妙の詞至極せり、其義は梶原さし赦す、早く仕度を仕れ、難有存奉る、跡々の義は重忠様、心置きなく最期を清ふ、いと御請も明衡が、無念の涙押隠し、心静に手を合せ、南無松島大明神弓矢神正八幡、奥州五十四郡を照し給え、鶴喜代の御武運長久、我こそ武運拙く共、死後には冥覽明らけ、是非潔白を神國の印を顯はし給へやと、祈念の中に貝田聲かけ、明衡、切腹とは武士の冥加、傍輩のよしみ某介錯してくれん、

過分、腹十文字にかき切て、と聲をかくる迄必早まり介錯すまど、無念の一言身も振はれ、天悪人に組せずとは、偽り成か、奇怪や、警骸は死するとも、魂君の影身に添、佞人原に目に物見せんと、肩衣はね退座を組で、差添に諸手をかけ、既にかふよと見へたる所へ、暫く待た明衡殿、松ヶ枝節之助是に在、貴人出席の其中へ、倍臣の參會御免に預ると、一卷片手に立田れば、貝田聲掛尾籠千万、爾既に以て事極た裁許をもどくは恐れ多し、早立去どさめ付れば、からりと打笑ひ、詞汝が手足と頼んたる常陸之助國雄を殺し、家の系圖奪返す、又砂川の屋敷にて、傾城高尾平産の姫君、義綱公諸共害せんとする汝が間者、此方へ召捕てうぬらが巧の底た、かす、最早遁れぬ覺悟、舌長也節之助、既に以て明衡が差上たる連判狀一字一點なき白紙、是則造な證據、其

一卷こそ子細有、國雄が幻術變上は印を有ん明衡殿、實も倅成一巻を、開けば姓名有くと元のごとくに鮮也明衡貝田をはつたと白眼、さんじうに等々汝讀聞すに及ねど、重て詞を出さぬ様、篤と夫にて承れ、此度冠者太郎義綱、並に子息鶴喜代丸、退且害せんと謀る事、則成就せば一味連判の輩は、其功の輕重に應じ、恩賞高祿宛行ふ者也、錦戸刑部太郎國純直勝と迄讀ぬ中二は成て倒伏、血刀引提飛鳥の如く奥の一間へ駆込ば、續松ヶ枝節之助遁さむ物と追て入、梶原俄にあはて出し、詞貝田めが死物狂ひ殊に松ヶ枝無法者、あいつがあはれ出したらば我等はお座にたまられず、武勇自慢の重忠殿、組留てたべ頼入と膝もがたく震ふる、重忠は脇目もふらさず、詞驚き入し貝田が手の内、伊達治郎明衡が帶する所の刀諸共、速に切放せしは通名作、是こそは先達て紛失せしとは聞たる亂髮の、

一腰ならん貝田が巧明白に顯る、其上に、家の重寶出る事、鶴喜代の運、目出度所と、劍戟を振其中は座席くさす優として座しむたる、寛仁大度を見事也、次の一間は鑿音及音手に取如く聞ゆれば梶原猶も尻居らず、詞アレく爰へ來るうらな、とふ致そふ重忠殿、コ、仰くし梶原殿、何の是式子細なし、終日の對決に拙者殆ど疲申氣を養ふは箇様の時、足下の手前で薄茶一ぶく、一つふくやら立腹やら、切腹しやうも知ぬしぎ、薄茶所で有ばころ、折節風呂に火の氣はなし、爐の炭も繼かへず本の是が冷火燧緩りとおあたりなされよと、尻に帆掛て走船梶原はうく逃出る、貝田を中に熊川松ヶ枝、何れ劣ぬ早業は目凄かりける、次第也、熊川は薄手を負、貝田を足下に節之助留めをぐつと差通せば、庄司重忠喜悅の肩、詞チ、出かしたりく、貝田が帶せし一腰は亂髮の一腰成ん、系圖の一卷家の重寶斯

一時に手に入上は、錦戸刑部は遠流させ、家の祭は万歳と、仰に
 兩人勇立祝ひ壽く池の龜、千代の榮を鶴喜代の、威勢は朝日の
 ぼるが如く實神國の人心一頼もしく其中に、申計はなかりける

天明五年己正月

伽羅先代萩終

明治二十七年三月一日印刷
 明治二十七年三月廿六日發行

發行所

東京市日本橋區通り四丁目七番地
 西村寅次郎

印刷者

東京市芝區田村町八番地
 潮來彦右衛門

發行所

東京市日本橋區通り四丁目七番地
 東雲堂

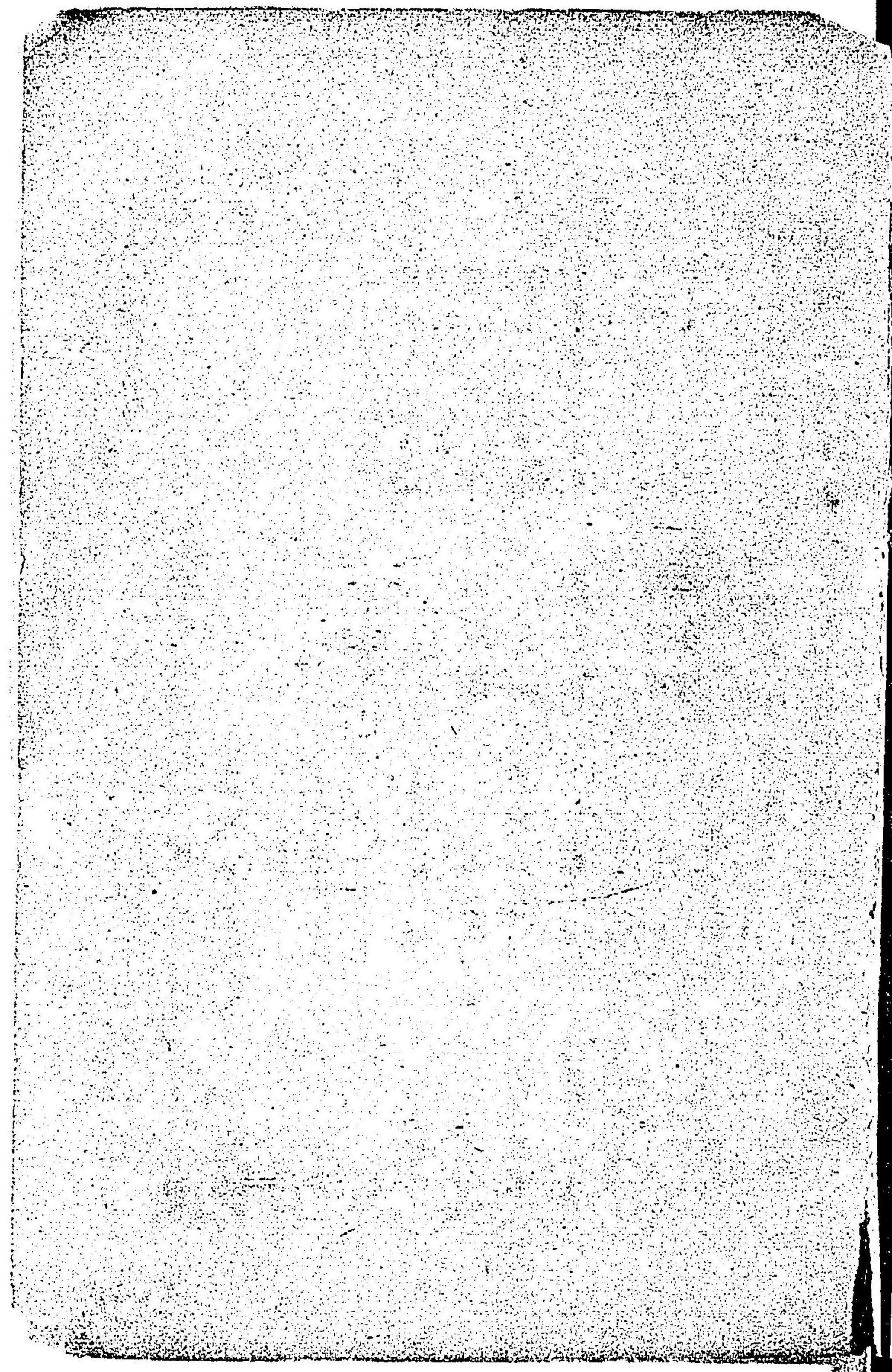
全

愛知縣名古屋市本町通六丁目
 東雲堂

全

大阪市東區本町四丁目
 東雲堂



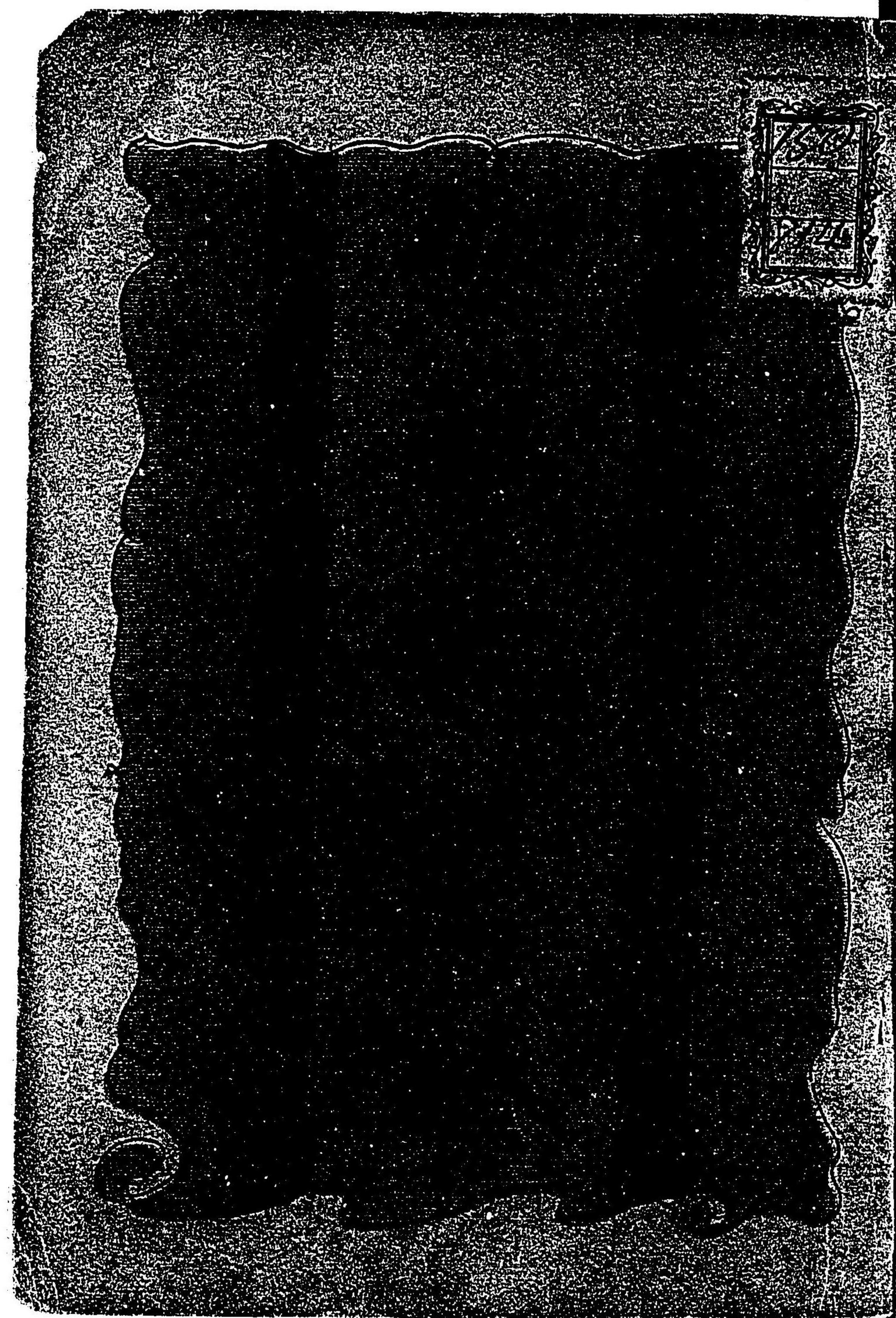


Faint, illegible text or markings on the right page of the document. The content is obscured by noise and low contrast, making it impossible to read. The text appears to be arranged in vertical columns, typical of traditional East Asian writing, but the characters are too faint to identify.



TOWUNDO

東 亞 堂 貨



205350-000-1

特65-248

伽羅先代萩

松 貫四 / 等著

M27

EDV-0534

